
～ 孤高の狼 ～

vf25g

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

～孤高の狼～

【Nコード】

N0595X

【作者名】

vf25g

【あらすじ】

いつもの日常を送っていた零はあることがきっかけで季衣と流琉という少女に出会う。

純真無垢な心を持つ二人と触れ合い、自分以外の存在の為に生きようと思う零。

群雄割拠の時代を二人を護りながら生きていく事になる。

第一章〜〜プロローグ〜〜（前書き）

初めての投稿なのでおかしなところが目立つかもしれませんが、読んでみて下さい。

第一章　　プロローグ

ズチャッ！

あたりにそんな音が響き渡る。いや響くといっても本来は響くような大きな音ではなく、とても小さな音だ。それでも響いたように聞こえるのは余りにもこの場に音というものがないからだろう。

「まったく、死ぬならもうちつときれいに死ねてんだよ、ああ……、めんどくせー。」

およそまともな人間の吐く言葉とは思えない言葉を言っている青年、零はつまらなそうに自らの足元に散らばっている人だった物を見渡すとかすかに動いていたものを掴みあげる。

「なんだ、まだ生き残りがいたのか。」

掴みあげられた盗賊はヒイツ！というとまるで化け物でも見るかのような視線で零を見る。

その視線に気分を害したのか零はムツとした顔を見ると男を男の足が届かない位置まで持ち上げる。

「そんな目で見るなよ、俺はお前達が襲ってきたのをただ返り討ちにしただけだぜ？どう考えてもそっちの自業自得だろうが。」

零の言っていることはもつともなのだが、何も知らない人が見たら確実に零の方が悪人に見える状況のため、いまいち説得力が感じられない。

なにせ、ただ見たままを言うなら無数の死体の中で一人の男が怯え

た男を掴みあげている絵になっているのだから無理もない。

「まっ、んなことはどうでもいいんだ。さっさとお前らが略奪していた物をためこんでいる場所を教えろ。」

零は地面に盗賊を放り投げると、足で胸のあたりを踏みつけながら質問、というよりは命令をする。

だが、盗賊は答えずにただ歯を鳴らして怯えているだけで口を開こうとしない。

普通に考えたら無理もない反応なのだが、零はその反応が気に入らなかったらしく男の左腕に向かって足を振り降ろす。

バキッという音と共に盗賊の絶叫が響き渡る。今度は静かだからではなく、どんな場所だろうと響くであろう音だった。

盗賊は痛みであればそうになるが零がそれを許さない、腕を折る前と同じように足で胸を押さえつけると、言わずともこれが最後のチャンスだと理解できる表情と声色で同じ命令をする。

盗賊は変わらず怯えた表情浮かべているがたどたどしい口調で喋り始める。

「こっ、ここからあそこにみつ、見える森のほうに真っ直ぐ行けば洞窟があるっ、そこにあるっ。頼むっ！見逃してくれっ！」

縋るように跪ずきながら命乞いをする盗賊を見下ろしながら零は小さく笑った。

「おいおいっ、今まで自分がされて無視してきた行動を自分でするのか？それに何の為に案内させないで、今聞き出したと思う？よく考える。」

瞬間、盗賊は全てをさとった。いや、全てというほど複雑なことで

はない。

ただ、自らの命がここで消えるという簡単なこと、ただ、それだけのこと。

だが、人間というものはなまじ他の動物より知能があるために自らが死ぬということすら理解できない。認めることができない。

「うわああああああ！！！！」

盗賊は緩んだ零の足を払いのけて一目散に走り出す。

思わず盗賊に同情してしまう程の何とも形容し難い表情で。

「まっ、そうなるわな。」

零はまるで盗賊が逃げ出す事が分かっていたように小さく呟くと、右手を口を持っていき口笛を吹いた。するとだんだんと蹄の音が聞こえてくる。

目にも止まらない速さで灰色の影が零の横を走り抜けるとそのまま盗賊に向かって突進していく。

そして、

グシャッ！

盗賊が比喻ではなく、潰れる音がした。

盗賊に悲鳴を上げさせる間もなくただの肉塊にしてみせた巨大でそれに見合う2メートルはあろう大剣を右の腹に括り付けた灰色の馬は今度は零の方向にゆっくりと走って行き、じゃれるように零にすり寄る。

「よしよし、よくやったな、牙。」

灰色の毛並を撫でながら自らの愛馬を褒めると牙に跨る。

「じゃあ、向こうの森の方に行ってくれるか？」

森を指差しながら言うともまるで返事をしたかのように鳴き、走り出す。

四、五分走ると洞窟が見つかり零は牙から降りて洞窟の中に入っていく。洞窟の中は四、五十人が入れる広さで布が一面に敷いてあり酒瓶がいくつも転がっている。

「まったく、もうちょっときれいにしておけよ。俺はきれい好きなんだよ。」

そんな、今となつては不可能な注文を言いながら、洞窟の奥にある布が被せてある大きなふくらみの方に歩いていき布をとる。

布の下にはかなりの量の金品と食糧があり、食糧にいたっては三十人程いた盗賊が満腹になるまで食べても十日は平気な量だ。

「もったいねえことしちまったかな。」

大量に積まれている食糧を眺めながら頭を？き、まっいいか、と言うと金品を漁りだす。

そして気に入つた物を御機嫌な様子で袋に詰め込んでいく。

「おつ、これなんて高く売れそうだな。いや、こっちなかなか、んっ？」

零はいかにも古そうな一冊の書物を手に取るとそれをじつと見つめる。

どう見ても値打ち物には見えないただの古い本だ。少なくとも素人

にはそう見える。

だが、そこが逆に引つかかったのか零はしばらく見つめるとそれを袋の中に放り込む。

「まっ、売れなかったら、売れなかった時って事で。」

そう言うともた次々に袋に詰め込み始め、袋がいっぱいになったところで立ち上がり洞窟を出る。

零はあたりをぐるりと見渡すと一つの村を見つけ、少し考えるような仕草をすると閃いた様に手をポンっとうつ。

「次はあそこの村にでもいこうかね。」

そう言うとき零は牙に跨り一言、言ってくれと言い、牙を走りださせる。

「土産もあることだしな。」

土産というのは無論、盗賊達がため込んでいた食糧のことだ。おそらく近くの村から盗ったんだろうと思った零はせっかくだから村に返してやろうと思ったのだ。勿論、ただの善意という訳ではない。零という男はそれほど親切ではない。食糧を渡す代わりに寝床を用意してもらおうと思ったのだ。

その村に自分の人生を大きく変える少女達がいるとは想像もせずに。

第一章〜〜プロローグ〜〜（後書き）

感想をバンバン下さい。
今後の参考にします。

出会いの前日（前書き）

一応、長ったらしくなく、それでいて内容が薄くならないように頑張ってみました。

何か助言があるなら下さい。

出会いの前日

零が盗賊達と遭遇する一日前。

とある村が盗賊に襲われていた。

「殺せ、殺せ――！！ぶっ殺せ――！！！」

盗賊の頭だと思われる二メートル程の大男が声を張り上げ、その声に応じて盗賊達が村人をさらに殺していく。

村人も抵抗してはいるが、元々村人は戦うのが仕事ではない。何人もの人間を殺してきた戦闘のプロに敵う訳がない。

戦闘のプロと言ったら兵士を連想するかもしれないが今の時代、墮落した下手な兵士などよりも常に実践で鍛えてきた盗賊の方が強いのだ。

これだけで今の漢王朝がどれだけ腐っているのかが分かるというものだろう。

そもそも何でこんなことになったかと言うと、それは三十分程前に遡る。

「それを返せつ――！」

「あつ？」

「やめようよお、季衣。」

季衣と呼ばれたピンク色の少しウェーブの掛かった髪を持った少女が盗賊の頭と思われる男に怒鳴り、それをストレートの水色の髪を持った流琉という少女が止めている。
だが、季衣は止まらない。

「ぼくたちの村にはもう食糧がほとんどないんだっ！それを持っていけたらみんな餓死しちゃうっ！だから・・・それを返せっ
！！」

季衣の言葉に他の村人もそうだったと、続く。

盗賊達は反抗的になった村人にたじろぎながら睨んでいる。

するとしばらく村人の抗議を聞いていた盗賊の頭が一人の村人の前にすたすたと歩いていく。

そして、

ズバッ！！

剣で斬りつけた。

季衣や流琉を含めたすべての村人が何が起こったのか分からないといった様子でピクリとも動かなくなった村人を見つめる。

「やめだ。素直に食糧を渡すんなら命までは盗らないでおいでやろうと思ったが・・・反抗するなら話は別だ。」

盗賊の頭はスウーと息を吸い、そして・・・

「てめえらッ！！二度と抵抗する気が起きないようにしてやれー
！！！！！！」

虐殺の合図が出された。

そしてときは戻る。

「ほらっ、季衣急いでっ！！！」

「流琉……」

流琉が季衣の腕を引いて森の方に逃げようとしている真つ最中なのだが、季衣はまるで芯が抜けてしまったかのようになっていて走ろうとしない。

「流琉っ……ぼくのせいだ……ぼくがあんなこと言ったからっ……」

大粒の涙を流しながら季衣が言っていると、流琉も立ち止る。そしてすぐ近くで起きている殺し合い……いや、ただの一方的な虐殺を見る。

最初は抵抗していた村人だったが、徐々に押されてきて今や勝負になっっていなかった。

流琉は次々に殺されていく知った顔を見ながら涙を流す。今まで我慢していたものが季衣の涙で溢れ出したのだろう。だがそれがいけなかった。

立ち止ってしまった二人に接近していた人物がいたのだ。

「へへっ、こんな所にもいやがったのか。」

「「!?!?」」

「俺もこんな餓鬼を殺すのは心が痛むが命令なんだな。」

季衣も流琉も目の前の男から逃げ出そうとするが体が動かない。

引き締めていた神経が解けたことや突然目の前に現れた盗賊への恐怖などが重なって体が動かないようだ。だがそうしているうちにも自分達の人生を終わらせる凶刃は迫ろうとしている。

そしてそのまま季衣と流琉、二人の人生は終わりを迎えるかと思われた。

だが・・・そうはなかった。

「うおおおおおおおおお!!!」

「ぐわっ!!」

一人の中年の男性が盗賊に突っ込み盗賊はそのまま三メートル程先に飛ばされる。

「とうちゃんっ!?!」

「早く逃げろ、二人共っ!!!」

「父様っ!!」

もう一人の違う流琉の父親と思われる男性が二人に逃げるように促す。

「でも・・・でも・・・」

「早く行けっ！！！！」

父親に怒鳴られ、我を取り戻した流琉は季衣の腕を取り走り出す。

「流琉っ！！とうちゃんがっ！！とうちゃんがっ！！」

十人近い盗賊に囲まれていく二人の父親を見ながら流琉を止めようと季衣は叫ぶ。だが流琉はそれには答えずにただただ走り続ける。小さな滴を流しながら……

翌日

悲しみに暮れた村人達がそこにはいた。

怪我をしている人を動ける人が助け、続々と亡骸を運んでいく。その繰り返しだ。

明るい顔をしている人物は誰一人おらず、皆絶望を顔に浮かべている。その一角に季衣と流琉はいた。

「父様っ……！！」

「ぼくのせいで……ぐすっ……」

季衣と流琉の前に二人の父親の亡骸は置いてあった。

二人は盗賊達が去ってからずっと亡骸の前を離れようとせず、泣き

続けていた。村長や村人が慰めてはいるものの、全く効果は無く。村人もどうしたらいいか分からなくなっていたところで灰色の馬に乗ってその人物は現れた。

「村長と会わせてもらえねえか？」

これが季衣と流琉の零との出会いだった。

出会いの前日（後書き）

・ ・ ・ ・ ・ 一回、家のブレーカーが落ちてデータがとんだ ・ ・ ・ ・ ・
・ ・ ・ ・ ・
・ ・ ・ ・ ・ 感想下さい ・ ・ ・ ・ ・
・

出会い（前書き）

ここからオリジナル設定爆発させていきたいと思っています。

出会い

「村長に会わせてもらえねえか？」

突然灰色の馬に乗ってやってきた零に村人のなんだこいつ？という視線が集まる。だがその村人の視線を無視しているのか気付いてないのか、零は構わずに続ける。

「あれっ？聞こえなかったのかな・・・村長にに会わせて欲しいって言っただけだ。」

本気でそんなこと言っているように見える男に茶色の髪の男が近寄る。

「悪いが、今、村長はいない。昨日盗賊に殺された者達を供養している。あんたには悪いが今日のところは帰ってくれ。」

いつもなら村に来た客人を歓迎するところなのだが、今は状況が違う。盗賊に食糧を奪われ、村人の半数程の人数を殺されて、絶望のどん底にたたきおとされた直後なのだ。歓迎などできるはずもない。

「ん~~~~、そうか、大量の食糧をやるうとおもっただが、そういうことなら仕方がないな。邪魔したな。」

いきなりとんでも発言をして、そのまま去って行くとする零。この行動は食糧を村人に渡すことが零にとってどっちでもいいことだから、するのだろう。

だが、生憎、村人にとってそれはどうでもいいことどころか命に関わる大切なことだ。そんな発言をしてそのまま行かせてもらえる訳

がない

「うわっ！なんだよ、いきなり。」

茶色の髪的青年は立ち去ろうとする零の肩を勢いよく掴んでいた。

「なんだよじゃないっ！！お前っ！イ甘、言ったことは本当なのか？！」

勢いよく零の肩を揺らしながら問い詰める。

「分かったから、いったん離れる！」

自分の肩を揺らす手を掴み無理やり引きはがす。そうされて初めて気づいたのか青年はすっすまん！と謝る。

「だが、本当なのか？お前は州牧の使者か何かか？だが、今の時代そんなことをする奴がいるとは思えないが……」

周りの村人がついに俺達の願いが通じたのか！とか神からの助けじやとか言っている。そんな様子を見た零はフーーと一つ溜息をつくと喋り出す。

「残念ながらお偉いさんが心を入れ替えたわけでも神の助けでもねえよ。ってか、神の助けならなんで使者が人間なんだよ。」

呆れたようにそう言つとまた一つ溜息をつく。

「じゃっ、じゃあ食糧ってのは……」

周りが肩をがつくりと落とす中で茶色の髪の青年は目の前の男の言葉の真相を確かめようとする。その青年を零はじつと見つめる。うっと青年はたじろいでなんだよと視線で言う。それを見た零はふつと軽く笑う。

「いや、偶然大量の食糧を手に入れたから数日間の寢床と交換にやるうと思つてな。」

「偶然、拾つたつて……っ！？ま、まさかお前、それつて盗賊が俺達から奪つていった物のことじゃっ！！」

「ん、多分そうだと思うぜ。よかつたな食糧が返ってくるぜ？」

スウィーと青年の顔から血の気が引いて行つた。おそらく目の前にいる男と共犯と思われてまた盗賊に襲われる未来でも想像したのだろう。まるでこの世の終わりだとも思つてそんな顔をしている。

「ああ、そうそう、盗賊のことなら心配しなくていいぜ。もう誰一人生きちゃいないから。」

えっ……と青年の顔に血の気が戻っていく。

「いつ、今なんて……？」

自分の聞き間違いだと思つたのだろう。何とも言えない表情で聞き直す。

「だから、盗賊はもう全員死んだつて言つたんだよ。」

目を二、三度パチクリさせる。青年だけではなく他の村人も同じ反

応をする。まるでこの世の音がすべてなくなったんじゃないかと勘違いするほどの静寂。

声を発したのは青年だった。

「な、なんで……なんでお前はそんなことが分かるんだ……」

「

「そりゃあ、盗賊の奴らを殺したのは俺だからな。知ってるのは当然だろ？」

「おつ、お前が殺した？何で、どんな理由で……？いや、その前にどうやって殺した？あいつらは何十人もいたんだぞ？」

ただ、事実だけを言われても納得できないのだろう。

無理もない。いままでさんざん苦しめられてきた盗賊がもういない。もうこの世にいない。もう襲われない。もう友や家族を殺されることがない。

平和に暮らせる。

そんなこと突然言われてあっさり信じられる訳がない。証拠を、信じられるだけの証拠を見せて欲しいのだろう。

そう、思った零は一言着いてこいというたとすたと歩きだす。その後ろを急いで青年と動ける者は追っていく。

「ちよつ、ちよつと待てよっ――！」

「いいから、ついてこい。」

それから零は目的の場所に着くまで一言も喋らなかった。

「ここだ。」

青年や季衣、流琉、村人達が連れてこられたのは森を少し離れたなにもない場所だった。

そこにはまだはつきりと人の死体だと分かる無数の肉塊が散らばっていた。

「こいつらだろ？お前らの言ってる盗賊ってのは。」

「確かに、こいつらはあの盗賊だ。」

「うっ・・・」

「大丈夫？流琉。」

あまりの光景に嘔吐する者が続出する。

その中で青年は逆に冷静さを取り戻したのか真っ直ぐと零を見る。

「これを・・・お前が・・・？」

「ああ、それじゃあ質問に答えようか。まず、何で殺したかっていう理由は特にない。」

「理由がない？」

「いや、正確には無かったと言うべきか。俺はこいつらを殺すつもりは無かったが、こいつらが俺を襲ってきたから返り討ちにした。ただそれだけだ。」

「・・・方法は？」

「これはもつと単純だな。ただこいつでぶった斬った。」

言いながら腰に差している剣を指さす。

「こんな奴らの血で俺の大牙を汚すわけにはいかないんでな。」

今度は牙の腹に括り付けている二メートル程の大剣を指さす。

説明が終わると暫しの沈黙が流れる。青年も季衣も流琉も、他の村人も目を閉じて感傷に浸るようになる。そして暫くすると。

「ありがとう。」

青年が礼を言うと次々零に礼を言う。

「おいおい、さっきも言ったが別に俺はお前らを助けようとして盗賊を殺した訳じゃない。そんな畏まって礼なんて言わなくていい。」

次々に礼を言われて零は少し戸惑った様子になる。

「たとえば、おにいちゃんにその気がなくてもぼくたちが助けられたのは変わらないよ。」

「そのですよ。」

「ああ、俺たちはお前に本当に感謝している。」

.....

あまり礼なんて言われたことがないのだろう。零は言葉に詰まる。

「そつ、そんなことよりも此処から森の方に真っ直ぐ行った所に洞窟がある。早く行ったほうがいいんじゃないか？」

そして、話を逸らした。

「それじゃあ俺は、村に帰る。行くぞ牙。」

返事を待たずに零は牙に跨り走っていつてしまう。

「ねえ、流琉。」

「何？季衣。」

「ぼく、決めたことがある。」

「わたしも。」

「多分、ぼくたち同じこと考えてるね。」

「私もそう思う。」

「後で、一緒に行こうか。」

「うん。」

「じゃあ、そういうことで少しの間、寢床を貸してもらつ。」

「ええ、そんなことでいいなら喜んで。」

あのと、零は改めて村長に会い食糧を渡す代わりに数日間寢床を貸してもらつことになった。村長には盗賊を退治してくれたお礼もしたいと言われたが盗賊を殺したのは偶然だからという理由でそれは断っていた。

「じゃあ、俺はもう寝る。」

そう言つと零は立ち上がり村長の家を出ていく。村長は出ていくその背中に向かつてずっと頭を下げていた。

「ふう、今日は疲れたな……。」

零は首をポキポキ鳴らしながら呟く、そこに二つの小さな影がザザツツと現れる。

「んツ？お前らは……。」

二つの小さな影の正体は季衣と流琉だった。

「なんか用か？」

二人は息をスウー スウー と深呼吸すると、一呼吸置いて、

「わたし（ぼく）を弟子にして下さい！……！」

こうして三人の物語は始まった。

出会い（後書き）

また、ミスってデータが消えた・・・俺って・・・

弟子入り（前書き）

二回も文章が飛んでいるので慎重に投稿しました。

どうぞ・・・

弟子入り

「……弟子？」

「うんっ！ばくたちにいちやんの弟子になりたいんだ。」

突然の季衣と流琉の発言を聞いて零は目を細めて聞き返し、それに元気良く答える季衣。

それを見た零は息をふうーと着いて自分の腰ぐらいの身長しかない二人をしっかりと見据える。

「お前達の親が盗賊に殺されたのは何が言いたかったのかは知らないが村長に聞いた。だが、敵である盗賊はもういない。一体何の為だ？」

零の言葉を聞いて思い出したように俯く。自分たちを庇って死んだ、親を思い出しているのだろう。

そして、絞り出すように季衣が口を開く。

「確かに、もうばくたちのお父さんやお母さんを殺した奴らはいない……でも！もしまた、昨日みたいなことが起きたとして、もう何もできないのは嫌なんだっ！！だから、みんなを守るぐらい強くなりい！！」

「お願いしますっ！！私たちを弟子にして下さい！！」

自分たちの気持ちを告げ、零の目を真正面から見つめるその目には確かな覚悟が浮かんでいた。

普通の者ならここまで純粋に正しい志を持って弟子入りを懇願され

たら、快く受け入れるだろう。
だが零はあえて、

「だめだ。」

断った。

一言で拒否された季衣と流琉は断られるとは思っていなかったのだろつ、その表情には驚きと戸惑いが浮かべている。

「なつ、何ですか・・・？」

「何で・・・か・・・」

流琉がおずおずと尋ねると、零はすぐには答えず少しの間を開ける。そして改めて季衣と流琉の目を見つめる。

「お前らに人が殺せるか？」

「「?!?!」」

零の言葉に二人とも固まる。何かを言おうと口を動かそうとしてはいるが言葉が出てこない。

「やはり、考えてなかったか・・・そんなんでよく弟子にしてくれなんて言えたな。」

「そ、それは・・・」

零の冷たい言葉に俯いて否定をしようとするが言葉が続かない。そこに零はさらに追い打ちをかける。

「さっきお前はみんなを守りたいと言ったがお前はそれがどういうことかお前達は全く分かっていない。殺す気でくる相手から仲間を守るということはこちらが生き残る為に相手を殺すということだ。お前らに殺すことができるのか？」

「こつ、殺さな「間違っても殺さないで守るなんていうなよ。」っ
!?!?!?」

「そんなことを考えながら戦っていたんじゃ守るところかただの足手まといだ。」

凶星を刺され、何も言えなくなる季衣と流琉。来た時の威勢はどこへやら、今ではすっかり小さくなってただ零の言葉を聞くだけになっ
てしまっている。

そんな二人を見て少し声を柔らかくして、言葉を続ける。

「お前らはまだ幼い。普通の家庭で今まで育ってきたお前たちにそのことを自覚しておけとは言わない・・・だが、もし強くなつてその力をどんな形であれ使おうと思うならばしっかりとそのことは覚悟をしておけ。誰かを殺すという覚悟をな・・・」

零の言葉を聞いて季衣と流琉は黙り込んでしまう。何かを言う様子も見られないので零は二人の横をすたすたと通り過ぎていく。
そして、二人に声が届くギリギリの距離で立ち止る。

「俺は五日後にここを出る。」

ピクッ

二人の肩が僅かに動く。

「まだ強くなりたい気持ちが変わらないなら。それまでもう一回、俺の所に来い。そのときの言葉しだいでは考えてやる。」

そう、言い残すとその後は自分の寢床になる家に入るまで立ち止る素振りも見せず歩いていた。

その夜、零は床に敷いた布団の上で仰向けになりながら眠れないでいた。

「（俺が他人に説教とはな……）」

ついさっきの二人の少女とのやり取りに零は少なからず驚いていた。普段なら理由も何もなく、ただ断って終われせるところだったはずの場面を断るところか説教をして、あるうことかチャンスまで与えてしまっていた。

今までも、武を志す者から弟子にしてくれと言われたことは何かあった。

だが、零はその申し出を受け入れたことは一回もなかった。理由は色々あったが、自分が生きるのに邪魔になるからというのが大きいだろう。

それなのに、今までの中で一番役に立ちそうもないまだ、幼い少女二人にチャンスを与えた。零はそのことがよほど疑問に思ったのかずっとそのことに関して考えていた。

「（親を失った二人に同情したとでも言うのか……）」

一つの同情で……という考えが出てきたがそれをすぐに否定する。今まで同情するような人間や街をいくつも見てきてそれらをことごとく見捨ててきたのだ。今更、同情なんてするはずがない。

じゃあ何なんだ、と思う。

同情ではない。なら一体何があの少女達にチャンスを与えるに至らせたのか。考えても考えても最後には分からないという結論に至る。そうやって、何時間も思案していると一つ思い至ることを見つけた。

「（昔のことでも思い出したのか、馬鹿め……今更そんなことを思い出してどうする。」

そう、零が思い至ったのは昔の自分と二人を重ねたという可能性だ。それならば気の迷いで二人に情けをかけてしまっても不思議ではない。ありうることだ。

もつとも、季衣と流琉、この二人と零とでは重ねるといっても、状況も襲ってきた不幸も比べものにならない。

今回、二人が味わった不幸など零にしてみれば日常的に味わっていたものとさして変わらない。

それほど零が今まで歩んできた人生はひどいものだった。

しかし、いくら、度合が違うといっても今のそれしか思い至る節がないため、零はとりあえず理由を小さい頃の自分と二人を重ねた為、今までと違う対応をしたということに落ち着けた。

そして、零はその結論に対してこう思っていた。

「くだらねえ……」

そして、五日が経った。

この五日間零は自分の武器の手入れや牙と遊んだりして過ごしていた。

つまりは旅の休憩として五日を過ごしたのだ。少なくとも周りの者にはそう見えただろう。

普通なら周りの者がせっせと働いているなか何もしていたら文句を言われるだろうが、零は盗賊を退治してくれた英雄として村の者に知られている。少しばかり遊んでいたところで文句を言われるはずもない。

実際は季衣や流琉のことを観察したりもしていたのだが。そんなこんなで迎えた五日目の朝。

二人の少女が零の家を訪ねてきていた。

「少しは考えたようだな。」

零の言葉に季衣と流琉はコク、と頷く。

「聞かせてみる。お前たちの結論を。」

「はい。」

季衣達が弟子になれるかなれないかを決まる瞬間が迫っていた。

弟子入り（後書き）

次で季衣たちが弟子になるかならないかが決まります。

始まり（前書き）

上手くできていると信じて投稿・・・・・・・・・・いつけーーーー！！！！！！

始まり

ガシャンッ！！！！

とある街の貧民街で何かが砕ける音が響く。

その、音は薄汚れた共同住宅のような家の一室から聞こえてきていた。

「てめえっ！！これだけしか稼いでこなかったのかっ！！！」

中年の男の殺気立った怒鳴り声が響く。男の目の前には頭から血を流している少年が一人顔を下に向けて立っている。

少年の顔は前髪に隠れて見えないが、おそらくその顔は悔しさに染まっていることだろう。怒りといってもいいかもしれない。

少年の握りしめた手から床に血が落ちる。そんなことには気づいてもないのだろう、男はさらに怒りのボルテージを上げて怒鳴りつける。

「俺の明日の分の酒はどうすればいいんだ！？おいっ！！！」

ドカツ！！

男のつま先が少年の腹に突き刺さり、そのまま壁に叩きつけられる。口から赤い液体が飛び散り床に染みをつくり、少年は腹を苦しそうに押さえながら耐えるように体を丸くする。

しかしその姿を見た男は手を緩めるどころか少年の背中を何度も蹴り続ける。

ドカツ！！ドカツ！！

部屋からは罵声とあきらかにおかしいなまりのある音が聞こえていくというのに、近くには助けるところか気に留める者もない。思ってもせいぜい、またか、ぐらいにしか考えないだろう。

そう、こんなことはいつものことなのだ。

少年にとっての普通の日常。
いつも通りくそったれの父親に殴られ、蹴られ、死ぬ前に飽きて寝てしまう。

そんな日常。

普通の子供なら耐えられないであろう理不尽な暴力。

少年はそれをずっと何も言わずに耐えていた。

何が少年を支えているのかは本人にしか分からないが……
何かを言っても無駄なのはわかっていたのだろう。少なくとも表面的には一回も立ち向かわなかったのはそういうところが分かっていたからだと思う。

「まったく、明日はもっと稼いで来いよ！」

ようやく蹴るのに飽きたようで自分の寝室へと帰っていく。

「くそったれが……」

少年は起き上がりもせず布団もない冷たい床で目を閉じる。

月明かりが少年を照らしていた。

その光はまるで少年を守っているように見えた……

「さて、聞こうか。お前たちの選択を。」

零の真剣な瞳を落ち着いた目で季衣と流琉は見ていた。

二人の心は自分でも驚くくらいに落ち着いていた。来る前には緊張と不安で忙しかった心臓も今は落ち着きを取り戻している。

そして意を決して二人は口を開く。

「正直、ぼくたちは人を殺す覚悟をしたかということ、まだできてません。」

「人を殺すっていうことはそう数日でできるものじゃないと思うから、簡単に、殺す覚悟ができました、なんて言っちゃいけないと思うんです。」

「・・・そうか・・・それじゃあ、お前らは一体なんの覚悟をしてきた？まさかなんの答えもなしに俺がうんと言うとは思っていないだろう？」

コクンツ、とうなずくと季衣と流琉は言葉を続ける。

「ぼくたちがしてきたのは覚悟じゃなくて決意です。」

「決意？」

「そうです。わたしと季衣はある決意をしました。」

「なんだそれは？何の決意をしてきた？」

零の問いかけに二人は改めて零を真っ直ぐ見つめる。

「守る決意です。」

「守る決意？」

「はい。確かにぼくたちにまだ殺す覚悟はできない。」

季衣はそこで言葉を切って流琉に繋ぐ。

「でも守る決意ならできます。みんなを、大切な人を絶対に守るっていう決意なら……。そのためなら人を殺すこともできます。でも、ただ殺すのと覚悟するのは違うから……。」

流琉も言葉を切る。

「だから、守る決意に基づいて頑張つて、そしていつか、誰かを殺す覚悟もできるぐらいに強くなりたいです。」

「ぼく（わたし）たちを強くしてください。」

これで、言うことは終わったと季衣も流琉も口を閉じ、頭を下げたまま緊張した面持ちで零の言葉を待つ。
短い沈黙が流れる。時間にしたら数分だろうが季衣達にしてみればとてつもなく長い時間だっただろう。

スッ

零の立ち上がる音に季衣と流琉は緊張を高める。
そして、ついに零が喋りだす。

「甘いな。甘すぎる。まだ、人を覚悟することはできない。けど、いつか来るともわからない覚悟のために自分を鍛えろってか……。」

・。

自分勝手もいいところだな。」

季衣と流琉は何も言えない。

それは自分でも分かっていたからだ。自分たちが言っていることが自分勝手のわがままだと。

それでも。

それでもこう言うしかなかった。これが二人の純粋な気持ちだったから。

仮に嘘をついて、それで弟子になれたとしても、いつか必ず心の中にある後ろめたさを見抜かれる。それに、人を騙してまで強くなるうとは二人には思えなかった。

もつとも、もし二人がここで平気で嘘をつくような人間だったならそもそもチャンスを与えられることもなかっただろうが。

しかし、いくら純粋に嘘のない気持ちだとしてもそれとこれとは話が別だ。

断られるかもしれない。そうなるかもしれないことは分かっていた。それを覚悟したうえで季衣と流琉は自分たちの素直な気持ちを告げたのだ。

それで断られても後悔はしないから。

「本当に甘い。甘すぎて反吐が出そうだ。」

零の言葉を弟子にはしてもらえないと取った、季衣と流琉は納得していた。

零の言っていることは正しいと、断られて当たり前だと。

それでも、自分たちに決意をさせた目の前の男に感謝していた。

断られはしたが、決意ができたことで一人でも強くなれると。

だが、その予想はいい意味で裏切られる。

「甘い。確かに甘い上に自分勝手だが………。悪くない。」

「えっ」

零の予想外の言葉に二人とも間抜けな声を出して顔を上げる。

「俺の言葉を聞いてちゃんと考えて自分で自分がどうするかを考えたのはお前らが初めてだ。」

今までの奴らはどいつもこいつも俺の言葉どうりに覚悟をただの殺せるだの言うだけだったからな。お前らは大したもんだよ。そうだな、いいかもなお前らなら。」

零の言ったことに数秒、季衣と流琉は茫然とする。

「えっ、えっ？それじゃあ……」

「ああ、いいぜ。お前らを弟子にしてやるよ。」

「いいいいやた————！！！！」

「やったねっ！！季衣っ！！！！」

「うんっ！！流琉！！」

無邪気に喜ぶ二人を見た、零はふっと笑う。

「おい、お前らこれから俺の弟子になるんだ。やることあるだろ？」

あつと顔を見合わせると気を付けの姿勢で零の前に並ぶ。

「ぼくの名前は許緒って言います。真名は季衣です。これからお願いします!!」

「わたしの名前は典韋って言います。真名は流琉です。よろしくお願いします!!」

元気よく挨拶した二人を見て零は本当にこの二人は純粹だと思った。

「俺は零だ。性も名も字もない。別に零と呼んでもいいが、鍛練中はやめろ。あと、喜ぶのはいいが、俺は甘くないぞ。覚悟しておけ。」

「「はいっ!!!!先生っ!!!!」

こうして零と二人の物語は廻りだす。

始まり（後書き）

違和感なく弟子入りできてましたかね？

次からは季衣と流琉の修行が始まります。

修行初日（前書き）

今回は少し長いです。

飽きてしまわないか心配ですが読んでみて下さい。

修行初日

季衣と流琉が例に弟子入りした次の日の朝、三人は村の近くにある小さな川に来ていた。

「さて、今日からお前たちを鍛えるわけだが、俺はそもそもちゃんとした訓練なんて受けたことがない。」

「えっそんなんですか？先生。」

流琉が意外そうな顔で尋ねる。同じ心境なのか隣で季衣も驚いた顔をしている。

「ああ、だから俺にまともな訓練なんて期待するなよ。それとしばらくは武器を使ったりもしない。」

「えっ、そんなんですか……」

「えーーーー早く戦うための修行がしたいよー。」

そうそうに武器が使つての修行が始まると思っていたらしく流琉は肩を落とし、季衣は不満大有りといった様子の目で零に抗議している。

「しばらくは戦うための基となるからだを鍛える。それと季衣、安心しろ。確かに武器は使わないがたいていの兵士なら素手で倒せるぐらいまでみっちり鍛えてやる。」

みっちりのところをやけに強調するという零に季衣はうっと後ずさる。

「しかし、兄様。ではどういったことをするのでしょうか？」
ジロリ。

「すつ、すみません先生。」

兄様と呼んだ流琉を人睨みして訂正させる。あの弟子入りの後に流琉は兄様、季衣はいちちゃんと呼びたいと言ったためその呼び名に定着した。最初はその呼び名を嫌がっていた零だったが無理に拒否しようとした際に二人が泣きそうになったため、渋々了解した。だが、それでも修行中にはそう呼ぶのは許さず、修行中は先生で落ち着いた。

「そうだな、まずは………隠れる。」

「えつ、隠れるってどういうことですか？」
あまりにも修行とはかけ離れた言葉に二人は目を丸くする。

「言葉の通りだ。お前たちは俺から隠れる。日が真上にきたら終わりだ。本当は夜のほうがいいんだが、流石に夜は獣が出て危ないからな。まだ、やらん。」

ちなみに真昼までは二時間程だ。

「えつと、にいちちゃん。そんなことでいいの？」

拍子抜けした顔で季衣が「それ本当？」という感じで確認すると、零はにやりと笑みを浮かべる。

「季衣。なめてるようだから言っというてやるが、もし俺に捕まったら昼は無しだ。」

!?!?!

途端に季衣の顔が焦り始める。まるでこの世で最も恐ろしい罰ゲームを突き付けられたように。いや、季衣にとってはこの世で最も恐ろしい罰ゲームなのだろう。

「逆に俺から逃げ切ったらお前が満足するまで食わせてやろう。」

一瞬だった。

一瞬で季衣の顔がいかにもやる気満々といった風になる。

「二人とも捕まったら終了、お前たちの負けだ。逆に逃げ切れれば俺がたつぷりと御馳走してやろう。使っている場所は森の中ならどこでもいい。なんなら俺を攻撃してもいい。俺はお前たちが離れるまで動かない。それじゃあ・・・」

零は二人の真剣な顔を確認する。そして、

「始めっ!!!」

ただのかくれんぼでは済まないゲームが始まった。

零は目を閉じて何もせずただ立っていた。二人が十分に離れるまで動くつもりなのだろう。

今回使われた森は盗賊達が使っていた森とは村から逆方向にあり、零と季衣たちがいた川は森を横に裂くようにある。面積は横×縦、

十キロメートル×五キロメートルで五十キロメートルだ。

とてもじゃないが別々に隠れた子供二人を見つけられる広さではない。

だが、零はこの広さの場所を季衣たちの隠れ場所に選んだ。選んだということは見つけられるということだ。

そして、きっかり十分たった瞬間零は目を開けてゆっくりと森の中に足を踏み入れる。

「さて、行くか。」

「はあ、はあ、はあ。」

川から二キロ程離れた気の陰に季衣はいた。

最初こそこの勝負をなめていた季衣だが、今は食事という最高の餌につられた狼になっている。食事を守ろうとする虎でもいいかもしれない。

季衣が最初にとった行動は距離をとることだった。季衣は開始と同時に森を走り続けて、とにかく零から離れた。

だが、森はただの平面の道とは違い当然道などない未開拓の土地だ。足元にある石や木の根っこには油断すれば足元を取られ、木の枝は肌を傷つける。

そんな理由で季衣は十分経ってもそこまで離れられていないというわけだ。

「（でも、にいちゃんも条件は同じはず。）」

そう同じ道を通るということは相手も同じ条件ということだ。
それが、分かっていた季衣は別段焦ってはいなかった。このまま進んで適当な所に隠れれば逃げられるはずだと。

「（ご飯♪ご飯♪）

もう季衣の意識はまだ見ぬ御馳走へといっていた……

一方そのころ流琉はというと……

「（あつ、動き出した!!）

零のことを見ていた。

「（季衣が行った方向にいった。なら……）

流琉とった作戦はとった作戦は一見、理に叶った作戦だがあまりに危険なものだった。

作戦はこうだ。

まず自分には見えて零に見えない位置まで移動する。そこで身を隠し、零を見張る。

そうして零の移動した逆方向に逃げるつもりなのだ。

「（我ながら良い作戦!!）

本人は自らの作戦を疑っていないが、実際この作戦には多くの危険があった。

まず、零を見張るためにあまり遠くに離れられない。もし零が自分の方向に来たら捕まえられてしまう可能性が高い。距離が開いていないため動けないのだ。動けばそこを見つけられる可能性が高い。つまりは五分五分だったのだ。自分のいる方向に来るか来ないかの五分五分なら最初から季衣の行った方向と逆に行けばいい。

さらにいえば達人にならその見ている視線で気づかれる可能性もある。見張っているのは一流の隠密でもなければ暗殺者でもない、ただの少女だ。まして、流琉は気配も何もなく本当にただ、見ていただけだ。

むしろ、見つかる可能性のほうが高かったようにも思える。見つからなかったのは奇跡のようなものだ。

詰まる所あまりいい作戦とは言えないものだったのだ。

だが、それも過去の話だ。零が自分の方向に来なかった今では最高の作戦になっている。

もう、流琉の勝利は決定したようなものだろう。

「（この、勝負。いたただきです！）

少なくとも流琉はそう確信していた。

零はというと・・・

「（まあ、いきなり捕まえちゃあ修行にならないからな。）」

完全に流琉に気付いていた。

「（確かに流琉の取った行動は悪くない。だがあればある程度気配が消せて初めて成立する作戦だ、まだ早い。）

そう、零は流琉をわざと見逃したのだ。だが、その行動は普通に考えたらあまりに無謀だ。本来なら流琉を最初に捕まえてその後じっくりと季衣を見つけたら済む簡単なゲームだったのにも関わらず自分で難易度最高の無理ゲーにしてしまったのだ。

見つけるべき対象が全く真逆の方向に逃げてしまったのだから、それも馬鹿でかいフィールドで。

無理だ。

普通ならそう考えるだろう。

だが零は立ち止まる首をポキポキ鳴らし、軽く屈伸する。

そして・・・

ダッ
!!

とんでもない速度で森の中へと消えていった。

「~~~~~♪~~~~~」

このかくれんぼだというのに鼻歌を歌っているこのピンク色の髪の少女は川から三キロ程の所に位置する高い木の上に隠れていた。

いや、鼻歌なんて歌っているもんだから位置はバレバレなのだが。大方まだ来るはずがないと思って油断しているのだろう。

ガサッ

「!?!?」

何か音が聞こえた。まだ季衣がこの位置に来てから五分と経っていない。来るはずが・

・
・
・

「このへんから聞こえたな。」

あった。

「(えっ? えっ!?! にいちゃんっ!?! そんな、まだたいして時間も経っていないのに!?! にいちゃんがずるするとは思えないし・
・ いやでも、そんな早く来れるわけが・
・
・
・ いやっ、そんなことはもうどうでもいいやっ!! とりあえず見つかりませんように!」

突然自分がいた木の真下に現れた零に季衣はパニックに落ちいつていた。

懸命に見つからないために動揺を抑え込むが、人間頭では分かっているけどどうにもならないことがある。正直、今の季衣は素人にも見つけられそうなくらいに「ここにいますよーー」みたいな気配を出していた。

しかしそんなことには全く気付いていない季衣はじくじくっつと零を見ている。すると零は右腕を顔の左側までゆっくりと持っていく。その様子を見た季衣は不思議そうに零を凝視する。

「?????」

そして零はその腕を木に打ち付ける。

ドオオオオン！！！！！！！！

轟音と共に木が折れるんじゃないかと思わせる程揺れる。

「うわわっ！」

あまりの揺れに季衣は木から放り出される。そしてそれを零は華麗にキャッチ！・・・はせずに足を引っ掴む。

「よお、馬鹿弟子。」

「ははは・・・」

逆さまに持たれながら苦笑いしかできない季衣であった。

零につかまった季衣は零の背中にしがみつきながら先程の疑問にたいして納得していた。

「（確かにこれならすぐに捕まっちゃうよ・・・）

零は季衣を背負ってるにも関わらず信じられないスピードで森を駆け抜けていく、まるで平坦な道を走っているようにも錯覚するほどスムーズに走るのだ。季衣はしばらく心の中で愚痴を零していた。そうこうしているうちに川を渡り流琉の向かった森に入っていく。

ここまでかかった時間、わずか五分だ、しかも全く息切れしていない。確かに反則的だ。

結局、その後森を走っていた流琉をなんの苦も無く捕まえ、かくれんぼは三十分と掛からずに終わりを迎えた。

そして全く抵抗らしい抵抗もできずに捕まえれた二人はどうしているかというところ……

ぐうう~~~~

盛大に腹を鳴らしていた。

かくれんぼ終了後、みっちりと説教された二人は夜になるまで延々と川の端から端までを走らされていた。走った距離でいえば五十キロはくだらないだろう。普通にフルマラソンを超えている。しかし律儀に走るのは子供故の純粹さからか流石というべきだろう。

「どうだ？気分は。」

地面に大の字になっている二人に零は楽しそうに声を掛ける。

「はあ……は……もう……だめ……」

「もう走れません……」

喋るのも辛そうな二人を見て満足そうな顔を浮かべる零は二人を抱えて自分の家へと戻っていく。思わずドS疑惑が浮上しそうだ。

そして、二人を食卓に座らせる。何かと二人が目を開けるとそこにはいかにもおいしそうな料理が所せましと並べられていた。

「につ、にいちゃん！！これって……！！」

「ああ、お前らは確かに負けたがその後の頑張りは認めてやってもいいと思つてな。夜ぐらいは御馳走してやる。」

「いつ、いいのですか・・・？」

控えめな流琉が遠慮するが季衣はもう待ちきれないといった様子だ。

「遠慮はするな。弟子入りの祝いだとも思えばいい。」

「はっ、はい！」

零の言葉に納得したのか、流琉は季衣と顔を見合わせると大きな声で食事の前のあの言葉を言つと競うように料理を平らげていく。零が意外な料理スキルを披露した瞬間だった。

「意外と根性のある奴らだったな。もっと文句を言つと思つたんだが・・・。」

食事を食べ終え寝てしまった二人を見ながら零は今日の一日を振り返つていた。

普通なら音を上げて逃げ出すほどの修行、それを流琉と季衣は最初こそ渋っていたが始まってみれば文句一つ言わずにやりきった。

「決意つてのも、本当のようだな。」

強くなるのに一番必要なのは類いまれなる天才以外は根性と努力。そして、絶対に強くなつてやるという決意だ。それをまだ子供だというのに既に二人は持っている。

「これなら、本当に何年か鍛えればかなりのものになるかもな。」

最初は自分の身を守るぐらいまでと思っていた零だったが今は違う。本当に仲間をどんな奴らからも守れる程に強くなる可能性を持った二人に楽しい気分になつてきさえいる。

「しばらくしごいてやるか・・・」

そして、明日はどんな風にしごいてやるうかと考えながら眠りに落ちて行った。

楽しいと思つたことなどいつ以来かも忘れたまま。

修行初日（後書き）

どうですかね？

なんか俺の中でかくれんぼって規模が変わればすごい修行になりそうないメージがあるんですけど。

他にもこんなのいいんじゃない？とかあったら感想下さい。

戦闘訓練（前書き）

特に書くことがない・・・・・・・・・・どつぞ・・・・・・・・

戦闘訓練

喜べお前ら。今日からは戦闘訓練に入る。」

修行初日から二か月の月日が過ぎた。季衣と流琉は二か月間の間零の修行に見事に耐え、今では見違える程の成長を遂げていた。

「やったーーーー！！もうかくれんぼとか鬼ごっことか球遊びとかその他もろもろやなくていいんだーーーー！！」

「もう、魚取りは嫌です・・・・頑張ったかいがありました・・・・」

どう考えても季衣達が口にはしているのは修行ではなく子供の遊びなのだが、それがただの遊びではないことは季衣の満面の笑顔と流琉のこれ以上ないくらいの安心きった顔が証明している。一体どれだけ厳しかったのだろうか・・・・

「ほう、お前達そんなに戦闘訓練がしたったのか。戦闘訓練のほうが一番辛いと思うんだが・・・・まあ、お前らは努力家だからな。」

瞬間二人の表情が効果音が出そうな程ピシッと固まる。そして恐る恐る季衣が笑顔を浮かべながら零の方を向く。

「ほう、ぼく前のままでいいかなあゝゝ」

「わっ私も・・・・・・」

二人の言葉を聞き零は目をパチクリさせるとやがて納得したように頷く。

「そうかそうか、お前らはそんなにあの修行が気に入っていたのかなら、戦闘訓練の合間を縫ってそっちもやるか!」

もちろん本気で言っている訳ではない。そんなことをしたら本当に二人が死にかねない。ただ、二人で遊んでいるだけなのだ。だが、そこは素直な心を持つ代表の二人。零の言葉を間に受け顔が見るうちに青に染まっていく。
そして……

「いや――――――――――」
「――――――――――!」

少女の絶叫が朝の森に響き渡った

「まあ、さっきのは冗談だとしてだ。」

暫く季衣と流琉を玩具にして遊んだ零はやつと真面目な話を始めた。もともと季衣も流琉も修行を開始する前からへとへとになってしまっている。まあ、二人をへとへとにした張本人はとうとうまるで忘れてしまったかのように何食わぬ顔で話を話しているが。

「本当にお前らは成長した。最初はまったく勝負にならなかったかくれんぼもちゃんと勝負として成立しているしな。あと、お前たち

に必要なのは技術だ。それさえそろえば実践をしても大丈夫だろう。」

実践。

つまりは人を殺すという事。季衣達はその言葉に気を引き締める。

「お前達もそろそろ覚悟を持てよ。」

二人は深く頷いて答える。もうさっきまでのふざけた雰囲気は零からも二人からも全く感じられない。遊びの時間は終わりということだ。

「さて、それじゃあ始める。まずは二人で俺にかかってこい。」

「えっ、いきなりっ？そんなの無理だよ！！どう戦っていいのか分かんないもんっ！」

「そうですよ先生。最初はどう攻撃したらいいとかそういうことから・・・」

突然のことに動揺する二人、だがそれとは対照的に零は冷静に話す。

「心配するな二人共。戦い方ならもう既にお前らの体の中に入っている。」

「そ、それってどういう意味ですか・・・？」

「考えてもみろ。お前たちはかくれんぼや鬼ごっこ、その他の修行でも俺に勝つために俺を攻撃したり、俺から逃げたりしていただろう。」

あつ、と二人は顔を見合わせる。

「それにどう攻撃したらいいとかそんなこと教えても無意味だ。自分で工夫して攻撃して俺の動きを観察して学習しろ。そして何か聞きたい所があれば俺に質問しろ。そうした方が本の通りにやる、百倍は強くなれる。」

零の説明を聞き二人は覚悟決めたらしく集中力を高めていく。

「じゃあ、いくよ。にいちゃん。」

「いきます。兄様。」

「先生だ。」

零の言葉が終わると同時に二人は一斉に地面を蹴り空中に飛び上がると、零との間合いを詰める。そして拳を勢いよく零の顔面に向かって突き出す。

「遅い。」

！？！？

二人の拳は零に軽く受け止められ、そのまま季衣は木に投げつけられる。加減はしているらしく季衣は大したダメージを負った様子はない。

「うわっ！いてて・・・えっ？」

続いて流琉も後を追う。

「うぎゃっ!」

季衣の顔面に見事に流琉の背中が激突する。

「無闇に飛び上がるな。空中では敵の攻撃を躲すことはできない。さあ・・・もう一度だ。」

「くそーーーー、今度こそっ!」

今度はスライディングの要領で零の足を狙う季衣。零はそれをひよいつ、とサイドステップで躲す。

「甘いな。」

「まだだっ!やあっ!」

左腕を軸にして体を捻り再び足を狙う。さらにそこに復活した流琉が、どれだけ跳んだのだろうか、零の頭目掛けて踵を振り下ろしていた。所謂踵落いわゆるとした。

それに対して零は躲そうとする素振りを見せない。

「(決まったっ!!)」

同時に二人は思った。しかし、二人の足には手ごたえが感じられない。それもそのはず当たっていないのだから。

「まあまあだ。」

季衣の足は零の足によって押さえつけられ、流琉の踵落としは片手で掴まれていた。そしてさっきの繰り返しだ。
二人はまたも、同じ木に投げつけられる。

「もう一度だ、来い。」

「ま、まだまだー！！！」

「まだですっ！！！」

季衣と流琉が木に投げられる作業は夜になるまで続いた。

「はっ、はっ、」

「ふう、ふう、」

日が完全に消えた頃、季衣と流琉はいつかのかくれんぼの初日の日と同じく大の字で地面に倒れこんでいた。いや、初日だけではなく毎日修行の終わりのには倒れこむことになっていたのだが。そしてお決まりの言葉で零が締める。

「今日はここまでだ。明日に備えるために飯を食って寝るぞ。」

ガバツと二人は二人は起き上がる。いや、起き上がるというよりは飛び上がったといったほうが正しいだろう。そのくらいの勢いで起きあがったのだ。さつきまで殆ど死人のようだった二人のいったいどこにそんな力があるだろうか。

実はこれ、初めてのことでない。初日以降ずっとこうなのだ。理由は後で分かるだろう。

「それじゃあ行くぞ。」

「「はい（うん）っ！」」

三人で零の家へと入って行く。するとそこには何時用意したのか豪勢な料理が並べられてあり、季衣と流琉は目に星マークが入るくらい輝かせている。

「いいぞ、食べても。」

二匹の獣が獲物に飛びついた……ように見えた。零の許しと同時に凄いスピードで料理を平らげていく。一応説明すると修行初日以来、季衣と流琉は零の料理の虜になっちゃっていったのだ。辛い修行に耐えれたのは修行の後の料理という楽しみがあったのは大きいだろう。

「ちゃんと食べておけよ。腹が減ったっていう理由で修行に集中できないんじゃないからな。」

「にいちやんの料理があればへっちゃらだよっ！」

答えながらも季衣は食べるのはやめない。そんな様子を零は微笑を浮かべながら眺める。

「ならいいが。」

「それにしてもいつも何時作ってるんですか？兄様。」

心底不思議そうに尋ねる流琉。それもそのはずだ、一日中一緒にいるのだから作る時間なんてないはずなのだ。この質問も一回目ではないのだが答えはいつも決まってるようだ。

「料理なんてそんなに時間の掛かるものじゃないからな。」

実際はそんな三分クッキングみたいに作れるレベルの料理ではないのだが、本人がそう言っているのだからと流琉もいつもこれ以上追及しない。

「まあ、そんなことはどうでもいい。食ったなら早く寝ろ。」

食べ終わって空になった食器を片づけながら零が言うと、はあゝいと季衣は布団の中に潜り込んでいく。

「では兄様、おやすみなさい。」

一礼して流琉も布団の中に入る。それを見た零は食器を洗うために川まで歩いていった。

その夜、台所では料理を洗う音ではない、何かを作っているような

音が聞こえた。

戦闘訓練（後書き）

なんかサブタイトルに合っていない気が……気のせい、気のせい（汗）

旅立ち（前書き）

難しい・・・もっと良くできるのは分かるのに、その方法が
分からない・・・

旅立ち

これは夢だろうか？少女達が最初に目に映る光景を見て思ったのはそんな言葉だった。知っている顔が逃げ惑いそれを追う醜い男達。その光景を少女は二度見たことがある。一つは今、目の前で。そしてもう一つは、半年前の忌まわしき日に。そして大切な人と出会うことになった記念すべき日でもある。

「なんでこんなことに……………」

そう思いながら立ち尽くす少女達に一人の男が近寄る。それは少女達が先生と尊敬する人物ではなく…………獣の一匹だった。

戦闘訓練が始まってから四ヶ月。零と季衣、流琉が出会ってから実に半年が経った日のこと、そのことだった。

「季衣、流琉。お前達をそろそろ実戦での修行に連れて行く。」

「「えっ・・・」」

「何を驚く。ずいぶん前から覚悟をしておけと言っておいただろう。」

確かに言っていたそれこそ本当に最初の時といえば半年前からだ。寧ろ今まで言わなかったのが遅すぎるくらいだ。季衣と流琉の実力はとくに一般兵士ぐらいの実力なら片手間で倒せるくらいにまでなっている。もっと早くに言い出してもよかったはずだ。それでも半年もの時間を与えたのは零なりの優しさなのだろう。だが、いつまでも先延ばしにするわけにもいかない。だからきりのいい今日に言ったのだろう。

「どうした。やはりいざ人を殺す時がきたら腰が引けるか？」

零の言葉を無言で首を振り季衣と流琉は否定する。

「そうじゃないよにいちゃん。確かにいきなりでびっくりしたけど、覚悟はできてるよ。」

「はい。その時が来たら必ずやって見せます。」

季衣も流琉も弟子入りした日とはまた違う覚悟した顔で答える。

「そうか、なら明日の朝に少し村から離れた盗賊共を殺りに行く。今日は修行はなしだ、ゆっくり休んでおけ。」

そう言い残すと零は森の中へと消えていってしまう。残された二人も零を見送った後、家に向かって歩き出す。

「季衣、実感ある？その・・・明日人を殺すっていう・・・」

流琉の顔は緊張でいつもの表情が作れていない。それを見て季衣は安心させようとしたのだろう、笑顔で答える。

「ないよ、だってまだ殺してないんだから。」

「それもそうだね」

季衣の言葉に緊張して固くなっていた顔を笑わせる。

「今、考えても仕方ないよ。覚悟はできてるんだし今日は休もう、流琉。」

「うん、季衣。」

二人は笑って家の中へと入って行った。

恐らくこのまま明日になり、零と共に盗賊の排除に向かっていたら、戸惑いや恐怖、罪の意識で落ち込むことになっても、次の日にはいつもの明るい二人になって、見事に覚悟を証明していただろう。そう、このまま何もなく明日になっただけ。

だが、神の悪戯か、運命は二人にそんな温い道は与えてくれなかった。

その日の夜。零は森の奥深くにまで来ていた。

「これだけあれば充分か。」

零は片手で担いでいたサンタさん宜しくの無駄に大きい袋を地面に降ろし中身を確認する。中に入っているのは多量の茸や山菜、木の実などだ。何故こんなことをしているかというところ。

「明日は少しくらい豪華にしてやってもいいだろう。」

そう、季衣たちの為に食糧を取りに来たのだ。どんな結果であれ明日は二人にとって辛い一日になる。ならせめてと、食事ぐらいは豪華にしてやることにしたのだ。まあ、普段のままで十分過ぎる程豪華なのは豪華なのだが、何よりも食事を楽しみにしている二人だ。それなら豪華なのをさらに豪華にしてみよう。と、こういう訳だ。

「帰るか。」

片手にサンタの袋、片手に熊を持ちながら、まるで、子供が店に遊ぶ○王の新パックを買いに行つて、まあまあ良いのが出たから切り上げるみたいな口調で言う姿はどっからどう見てもおかしい。しかも今回零は武器を持ってきていない。しかし熊は見事に頭を割られて息絶えている。ここから導き出される答えは、熊を素手で殺した、だ。しかも傷一つ無く。化け物じみている。

そんな人物に育てられた季衣と流琉もやはり化け物じみた強さになつてのことだろう。

「まあ、正直問題ないと思うんだがな。」

実際の所、零はそれほど二人を心配していなかった。二人が強くなつたのは二人を育てた零が一番良くしっているし、二人に覚悟がもうできているのも分かつていた。だからこそ言い出したのだ。そもそも零は二人に何だかんだで甘い。修行の時以外はそれこそ以前では考えられない甘さだ。本人も自覚はしているのだが止める気もなかった。それは零自身が二人との時間を楽しいと思つてしまつてゐるからでもあり、昔から自分が望んでそれでも手に入らなかったものだからだろう。

「ん？何だ、あの光は・・・・・・・・・・」

季衣と流琉の村、自らも何だかんだで半年も居座ることになつた村がある方向から光が見える。何だ？と、零は不思議に思い木の上に登つて目を凝らす。

「あれはつ・・・・・・・・！！」

見えたのは燃え盛る村、顔までは分からないが、逃げ惑う者とそれを追う者。

「くそっ！！！」

零は木から飛び上がり着地すると、自分が取つた食糧ぬは目もくれずに走り出す。

「間にあつてくれ・・・・・・・・！！」

二人の少女のことを思いながら零は走り続ける。

「ん・・・・・・・・なんだろう・・・何か外が騒がしいな・・・・・・・・」

布団の中で安眠に浸っていた季衣は外から聞こえる音に目を覚ました。おかしいな？と、季衣は思った。季衣と流琉が生まれたこの村は毎日農業をして食事をして寝る。それだけで満足するような村なのだ。お祭り騒ぎもしなければけんかもしない、そんな穏やかな村。そこが盗賊に狙われる要因の一つだと言えるが、それは今はとりあえずいい。

つまり、家の中にまで聞こえる大きな音など普通、ありえないのだ。
・・・・・・・・

特別な状況以外は。

「流琉、流琉っ！起きてっ！！」

「う~~~~ん・・・・・・・・」

思いつきり寝ぼけた表情で、むくりと流琉は起き上がる。

「どうしたの・・・？季衣・・・・・・・・」

「何だか外がおかしいんだ。とにかく早く起きてっ！」

季衣は首が取れるんじゃないかと思う程の勢いで流琉の肩を揺する。

「ちよつ、ちよつと季衣っ！！おっ、起きたっ！！起きたからやめてっ！！」

季衣は流琉の意識が完全に覚醒したことを確認すると揺するのを止めて流琉の腕を引いて扉まで連れて行く。そこからはどう考えても穏便ではない音が聞こえてくる。

「なっ、なんなのこれ・・・？」

「分かんないよ・・・けどなあかよくないことが起きてる気がする。」

「とりあえず、出してみようよ、季衣。」

「うん、そうだね。」

季衣は流琉に促されて扉を開く。そこに映っていたのは半年前にも見た光景。

そして、できればもう二度と見たくないと願っていた光景。

その光景を見ないために血反吐が出る程の修行にも耐えた。なのに、そこには見たくない、映ってはいけない光景があった。

「なんでこんなことに・・・」

目の前の光景を見て愕然とする季衣と流琉。そこに近寄る一つの影。

「こんな所にもいやがったか。餓鬼を殺すのは忍びねえが生かしておいても仕方ねえだろ。もうほとんど殺しちまったからな。ここで死んどけ。」

デジャブ。

季衣と流琉の頭のなかではそれが起きていた。

半年前、同じように盗賊に殺されかけ、その時は自分の無力のせいで親を失った。

だが、今は違う。

今はあの時とは違う。

そう思った瞬間、季衣と流琉の体は動いていた。

バキッ！！

何が起こった！？盗賊は突然体を襲った衝撃を理解せずに宙に浮いた状態でそう思う。そしてそれが、盗賊が最後に考えたことになった。

グサッ！！

男の喉に剣が突き刺さる。剣を持っているのは季衣と流琉だ。

季衣と流琉がとった行動は実に簡単だ。盗賊が剣を振り下ろした瞬間、季衣と流琉は盗賊を蹴り飛ばし、その時盗賊が手放した剣を手に取り突き刺す。ただそれだけ。

ただ、それだけの行動ではあるが、普通ではない。そもそも先に攻撃したのは盗賊だ。それなのに季衣と流琉の攻撃の方が先に相手にあたった。つまり後だしをしたのにもかかわらず、二人の蹴りは余裕で相手の速度を追い越して先に当てたのだ。こんなこと相当な実力差だないと無理だ。つまり、季衣と流琉はそれほど強いのだ。

そんな二人が、怒りに身を任せて暴れたらどうなるか。
考えるまでもないだろう。

村が村人のではない血で染まった。

「はあ・・・はあ・・・どこだ・・・？・・・どこにいるんだ、季衣、流琉・・・！！！」

村に着いた零は息を切らしながらも季衣と流琉を探す。だが、ここにも二人は見つからない。それどころか、人の気配が感じられない。村人も盗賊もどこにもいない。あるのは殺された村人の亡骸だけだ。零は一瞬、最悪のイメージを思い浮かべ、それをすぐに振り払う。

「無事でいてくれ・・・・・・」

そう願いながら村を走り回り、零はそれを見つけた。

「季衣・・・流琉・・・」

そこには血まみれになった木衣と流琉がいた。ただし、自分のではなく盗賊の血で。

「にいちゃん・・・？」

「兄様・・・」

「ああ、俺だ．．．．．これは、お前たちが？」

零が周りにある盗賊の死体を見ながら言うと、季衣はどう見ても作り笑いだと分かる笑顔で喋り出す。

「うん．．．．．なんかさ．．．．．自分が死にそうになった時に、なんだかわけ分かんなくなってる．．．．．気づいたらこんなことに．．．．．」

「私です．．．．．気づいたらたくさんの人を．．．．．殺していました．．．．．」

そんな今にも壊れそうな笑顔で話す二人を見ていられなくなった零はそつと、本当にそつと、そして力強く抱きしめた。

「すまない。俺が村にいればこんなことにはならなかった。お前たちの覚悟をこんな形で見るようになってしまってる．．．．．本当にすまない．．．．．!!」

零の言葉聞いて我慢できなくなったのだろう、二人の目から溢れるように涙が出てくる。零はそんな二人を胸に引き寄せる。

「「うつ．．．．．うわああー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！ー！」」

その日、零は二人が泣き止むまで抱きしめ続けた。

翌日

季衣と流琉が泣き止んだ後、零は二つの選択肢を二人に出した。一つは違う村まで零に送ってもらい、その村で暮らすというもの。これなら高確率で引き取って貰えるだろう。今の時代でも子供を欲しがる家の一つや二つはあるはずだ。もしいなくても、季衣と流琉なら用心棒として居させてもらえる。零は最初、この選択肢を進めた。そしてもう一つが自分と共に旅をするというものだ。零はこの選択肢は進めなかった。まず、一ヶ所の場所に留まらないため、落ち着いた生活ができない。さらに、まともな仕事はしないため常に命の危険が付き纏う。どう考えても、普通に考えたら前者の方が良いに決まってる。当然だ。

片や安全な村暮らし、片や命の危険が付き纏う旅だ。零と出会う前の季衣と流琉な迷わず前者を選んでいただろう。そう、出会う前なら。

「にいちゃん（兄様）と一緒に行くっ！」「」

これが二人の出した答えだった。その答えを予想していたのだろう、零はただ、そうか、と、言っ二人に村への別れを済ませとくように言い、村の出口で待っていた。

「本当に行いのか？」

「うんっ！ー！ぼくたちはにいちゃんとずっと一緒にいるよ！ー！」

「これからよろしくお願いします、兄様。」

「そうか、じゃあ行くか。牙っ!!」

主人に呼ばれ森から出てくる牙。基本的に牙は放し飼いなのだが、零に呼ばれると必ず姿を現すから不思議だ。

零は牙に季衣と流琉の二人を乗せ、自分も乗ると牙を走らせる。

「じゃあな。」

誰もいなくなつた村に一言残して。

旅立ち（後書き）

次からは他の恋姫も出ると思います・・・・・・・・多分・・・・・・・・

というか、牙が久しぶり過ぎる。

危うく存在を消してしまうところだった。

第二章――新たな生き方―― 武器（前書き）

二章突入です！！

頑張ります！

第二章　　新たな生き方　　武器

零達が村を出て一週間のある日。

「どれか気に入った武器はあるか？」

三人は陳留という街の武器屋・・・ではなくその隣の街の武器屋に来ていた。

「う〜〜ん・・・流琉はある？」

「私は良いんじゃないかな、と思うものはあるんだけど、これっ！
！っていう物が無い感じかな。季衣は？」

「ぼくもそんな感じ。」

「これだと思っ物が無いなら選ばない方が良い。武器っっていう物は長い付き合いになる。謂わば相棒みたいな物だ。」

零の言葉を聞き、さらに、唸りを上げながら顔を顰める季衣と流琉。店の品揃えは決して悪い訳ではなく、寧ろ充実していると見えるだろう。店の広さは普通の家の二倍程の広さがあり、一階と二階を遮る天井は無い。一階に当たる階には台が人の通れる程の間隔を開けて並べてあり、その上に剣やら盾が並べてある。壁や天井には剣や盾ではない一風変わった武器が飾られている。

「値段のことなら心配しないでいいんだぞ。金ならそこそこある。」

飾られている物はそれなりの値段をしている為、遠慮しているので

はないかと思つた零はそう言つてみるが、二人は相変わらず難しい顔をしている。遠慮とかではなく、本当にピンとくる物がないのだらう。

そもそも、何故武器屋に来ることになつたかという、それは二日前に遡る。

・
・
・
・
・

その日零達は野宿の為に食糧として熊を狩りに来ていた。夕飯の食糧に熊が選ばれるという事に色々と突っ込みたいところだが、この際それは無視しよう。とりあえず、そういう訳で森に足を運び、見事に狙いの熊を見つける零たちだった。狙われた熊はお気の毒としか言いようがない。

「そつちに逃げたぞっ！季衣！流琉！」

「まっかせてー！ー！！」

「任せて下さいー！」

零に追われて逃げ出した熊に小さい悪魔が二人跳び掛かる。熊はただの子供が二人だと思つたのだらう。迎え撃とうと自慢の爪を構える。

「やああああー！！」

バゴッ！！

見事、木間の頭にヒットする季衣の拳。その余りの衝撃に熊はふらふらと後ずさる。だが、熊も負けてはいない。反撃しようと爪を季衣目掛けて振るう。

「おつとつ！！」

それを紙一重のところでは回避するが、バランスを崩して倒れてしまう。季衣。それを見た熊は勝機と見て、第二撃を繰り出そうと右前足を振り上げる。だが、そんなことをもう一人の悪魔が許すはずもなく。

「はああああ！！！！」

ズドッ！！

流琉の跳び蹴りが熊の腹に炸裂する。季衣のパンチに負けず劣らずの衝撃を腹に受け、倒れこむ熊。そこにさらに追い打ちをかける二人。完全なリンチが始まった。

「どうした？季衣。目を瞑って唸ったりして。」

無事に熊を仕留め、零が調理した料理を三人で食べた後、胡坐をかきながら唸っている季衣を見て不思議に思った零は季衣にそう尋ねていた。

「いや、今日の熊と戦った時に思ったことなんだけど…….
ぼくもそろそろ武器が欲しいなあつて。」

「それは別にいいが、何故急に？」

「うん、今日熊と戦った時にぼく熊に反撃されて体制を崩したじゃない？その時に思ったんだけど、ぼくとか流琉はまだ子供で体が小さいからどうしても相手より間合いが狭い。だから相手に近寄らなくちゃいけない。でもそれだと武器を持っていないぼくたちは相手に反撃された時に躲すしかない。それだと戦いにくいから、武器が欲しいなあ…….と。」

「確かに私もそう思います。勿論、兄様に許して貰えたらですけど…….」

季衣の言葉を聞き少し考える零。

「確かにお前たちにもそろそろ武器を与えるべきだな。今のお前らなら武器に振り回されるという事もないだろうし。よし、そうと決まれば少し大米はたぐことになっても武器を買うか。」

「ほんとにつ……！」

「ああ、それじゃあ、当初の目的地だった陳留は後回しにして近くの村で武器を買ってから行くか。こういうのは早い方が良くからな。」

」

「……という訳で、武器屋に来た零達だったのだ。まあ、武器探しは見ての通り難航している訳だが。」

「何か希望の武器の形とかはないのか？」

「いつまでも悩んでいる季衣と流琉を見兼ねた零は季衣と流琉がいるコーナーの武器を眺めながら聞いてみる。」

「あるにはあるんだけど、あんまり武器らしくないって言うか……」

「流琉はあるのか？」

「はい。私もありますけど、やっぱり季衣と同じで武器じゃあないんですよね……」

「あるなら取り敢えず言ってみる。このままじゃあ、拉致が明かない。」

少し言いにくそうな素振りを見せながらボソツと呟く二人。

「けん玉……」

「葉々です……兄様……」

「けん玉に葉々が……確か、お前らが一番愛用していた玩具だったか？」

「はい、そうです。昔から使っていた物なら上手く扱えるんじゃないかと思ひまして……」

「ぼくも。」

零はうゝんと手を顎に当て、少し考え込む。

「（確かに、いきなり使い慣れていない剣や槍を使わせるよりはいいか……）

いいかもしれないな、それにしよう。季衣、流琉。」

「えっ、いいのっ!？」

「いいんですか!？兄様!？」

零の予想外のオーケーの言葉に驚く二人。まあ、当然の反応だろう。普通、玩具を武器にしたいなんて言っても怒られるだけで、許して貰えるなんてことはない。

「店主。ここにはない武器を注文して作って貰うことは可能か？」

零が呼びつけるとかなりガタイの良い、親父が商売スマイルを顔に浮かべながら出てくる。

「へえ、できさあ。それで、どういった武器をお求めで？」

店主に尋ねられ、零が季衣と流琉に説明を促すと店主は驚いた顔をしたが、すぐに元の商売スマイルを浮かべて二人の説明を真剣に聞く。

「……と、こんな感じです。できますか？」

説明し終わった流琉ができるかどうかを聞くと店主が顔を下げてプルプルと肩を震わせているのを見て戸惑う。すると店主が突然顔を勢い良く上げる。

「まっかせて下さいっ！！絶対に造つてみせます！！！！いや、造らせて下さい！！！！そんな興味の引かれる武器を聞かされちゃあ、職人魂が騒ぐつてもんでさっ！！！」

どうやら、店主の職人魂に火を点けてしまったらしい。武器屋には武器の作成は他に頼んで売る店と自分で造った武器をそのまま売る店があるが、どうやらこの店は後者だったらしい。

そんな訳で、店主の一週間以内に造つてみせるといふ熱い言葉を聞いた三人は店を出て昼をどこで食べようかと街を歩いていた。

「何か食べたい物はあるか？」

「う〜〜ん、ぼくはラーメンが食べたいな。」

「そうか。流琉は？」

「私もラーメンでいいです。」

「じゃあ、あそこにも入るか。」

零はたまたま目に入ったラーメン屋を指差し、二人を連れて入って行く。陽気な親父の声を聞き、席に座る。季衣と流琉はどれにしようかメニューを眺め、軽く普通の人じゃあ食べられない量を注文する。店主は一応合ってるか確認を取るが、季衣に睨まれたので口を

閉じる。そして、気を取り直して零に注文を取りに来る。

「何にいたしやしょう?」

「そうだな……それじゃあ、この特性メンマラーメンを。」

「畏まりました。」

そう言くとラーメン屋の親父は厨房に入って行く、そして程無くして注文したラーメンが並べられる。季衣たちがすごいスピードでラーメンを食べ始める横で例も自分のラーメンを口にする。

「うっ、上手い……特にこのメンマ………いつたいどうやって作っているんだ……」

零がメンマの余りのおいしさに驚いていると突然店の中に一人の女性が入ってくる。そして、

「よく、分かってらっしゃるっ!?!?!?!」

槍を携えた凜とした女性だった。

第二章――新たな生き方―― 武器（後書き）

お分かりになっている人が多いと思いますが、あの人です。

昇り竜との出会い（前書き）

星の登場です！！

星は恋姫の中でもかなり好きなキャラです。

まあ、物語にどの程度絡んでくるかは未定ですが……

どうぞ。

昇り竜との出会い

「よく、分かってらっしゃるっ！！！」

突然、大声で叫びながら店内に入ってきた女性に客の目が集中する。だが、そんな事は露知らずと槍を携えた女性はズカズカと零と季衣のいる席にやって来る。

「いや〜〜お主もなかなかお目が高い。このメンマに目を付けるとは……………」

うんうんと、頷きながらそんなことを言っている女性に周りの客は「またか……………」と思いながら溜息を着きながら視線を外していく。しかし、目の前の女性のことを知らない零は驚いたような、戸惑ったような視線を向ける。そんな零の視線に気づいた女性は失敬失敬と咳払いを一つする。

「これは失礼した。つい、同じメンマ好きに会えたと思うと居ても立ってもいらなくなってしまうてな。自己紹介もせずに話し掛けてしまった。」

「いや、それは別にいいが、あんたは？」

「別に俺はメンマ好きではないんだが……………」と思った零だったが、そんなことを言ったらまた話がややこしくなりそうなので黙っておく。

「我が名は趙雲。今は旅人をしている。」

「今は？」

「うむ、私は武人なのだが、我が主に相応しい人物を探す旅をしているのだ。」

背中に背負っている槍を見せながら説明をする趙雲。

「なるほど。その様子だとまだ自分が仕えるに値する人物には出会えていないらしいな。」

零の言葉に一瞬、ポカーンとする趙雲。

「笑わないのですな。普通、この時代に主を探して旅をしているなんて言ったら笑われるものだが……………」

フツと笑う零。そんな零を見て趙雲は益々不思議そうにする。

「自分の力量も分からず生意気に主を選ぶ阿呆と、自分の力量を分かった上で自分に相応しい主を探す武人くらい、見分けはつくさ。」

零の自らの力量を一瞬で見抜いた碧眼に驚いた趙雲だったが、直ぐに顔に笑みを浮かべる。

「ふはははは！！いや、これは失敬。ただのメンマ好きではないとは思っていたがこれ程とは……………」

「そんなことはない。誰だって分かるさ。」

「いや、そんな謙遜することはあるまい。貴方も私と同じ主探す武人かな？」

「何でそう思う?」

「それこそ誰にでも分かるだろう。お主が相当の実力者だということぐらい。」

試すように問い掛ける零に趙雲は別に怒るわけでもなく微笑を浮かべながらそう返す。

「フツ、そうか、これでもそういう雰囲気は隠しているんだがな。」

「本当に強い者というものは同じ者には分かるものなのだよ。」

「確かにな。」

微笑を浮かべながら言う趙雲に零も笑いながら言う。

「さて、質問に答えようか。結論から言うと、俺は武人ではない。ただの旅人だ。」

「ほう……そちらの少女二人は?」

「にゃ?」

趙雲が入って来た瞬間だけ目を向け、直ぐにラーメンに視線を戻して食事を再開させていた季衣はすでに十杯目となっていた丼を机に置くと、趙雲の方を向く。それを見た流琉も八杯目の丼を机に置き、振り向く。

「少女達は彼の妹か?」

「えっ、違うよ！！にいちちゃんは兄弟じゃなくて先生だよっ！！」

「それにしても兄と呼んでいるのだが……………」

手をぶんぶん振りながら否定する季衣に趙雲が的確な突っ込みを入れる。

「私達は、村が盗賊に襲われたところを助けて貰って、それ以来兄様は私達の兄替わりみたいなものです。」

「なるほど……………これは思わぬ武勇伝を聞いてしまった。」

「武勇伝なんてたいしたものじゃあないさ。」

関心したように頷く趙雲にたいしたことじゃあないと茶を飲みながら言う零。そんな零を見て趙雲がからかうような笑みを浮かべる。

「おやおや、またそんなご謙遜を。堂々と自慢すればいいものを。」

「別に謙遜じゃあないさ。俺がこいつらを助けるに至ったのは唯の偶然で、別に助けるつもりはなかった。」

「それでも、お主は目の前でこの子達が殺されそうになっていたら助けただろう？」

「どうだかな、俺はそんなに優しい人間じゃあないぜ。」

そう言う顔と顔を背ける零。そんな礼を見て、くすりと笑うと、趙雲は季衣と流琉を見る。

「（全く、ここにお主の優しさの象徴とも言える少女が居るというのに。）」

そんな事を考えているとは分らない季衣と流琉は首を傾げる。その一点の穢れもない純粋な表情を暫く見ると、スッと立ち上がる趙雲。

「さて、私はこれで失礼しよう。連れがいるものでな、お主たちは暫くこの街にいるのか？」

「いや、俺達は一週間後にはここを出る。あんたと会つのはこれが最後かもな。」

「それは残念。お主の名は？」

「俺は訳あって、真名しかないと名乗れない。すまん。」

「そうか……まあ、何か事情があるのだろう、深くは聞くまい。」

「助かる。」

「人には言いたくない事の一つや二つはあるものだ。」

そついう趙雲の器の広さに関心する零。

「それではまた出会えるその日まで去らばだ。」

そつ言い残すと背中を向けながら手を振り出て行く。

「いい人でしたね、兄様。」

趙雲が出て行った出口を見続ける零に流琉が素直な感想を口にする。

「ああ、そうだな。」

質素な答えを返すと、零は机に御代を置いて店を出ていき、その後を急いで季衣と流琉が後を追う。心なしか店を出て行く零の顔は笑っている気がした。

一週間後。

「これですっ！……ご希望通りに仕上げたつもりですが、どうでしょうっ！……！」

武器屋の親父が指定した一週間経ち、零達、三人は再び武器屋に来ていた。

「おおおおお！……すごいよ、おじさんっ！……！」

「私たちが注文した通りになってます！」

床に置かれた鉄製の台の上にはどう考えても子供が扱う大きさではないサイズの武器が置かれている。季衣が注文した武器はけん玉というよりは鉄球だが、注文する際に季衣がそれでも問題ないと言ったため注文通りと言える。季衣の鉄球は直径六十センチの鉄製の球の周りに棘があり、それを鎖で振るう形になっている。流琉の頼んだ葉々はそのまま葉々を大きくしたような形で、普通の葉々と違うのは素材が鉄で出来ていることだろう。

「満足していただけたなら喜ばしい限りです。私も久々の大仕事で楽しかったでさあ。」

「良い腕しているな、店主。また、機械があつたら来るとしよう。その時は宜しく頼む。」

季衣と流琉が軽々と自分の武器を担ぎ上げ零と出て行こうとすると、店主が有難うございますと頭を下げ、それに零が軽く手を振り店を出ていく。

「どうだ、扱えそうか？」

「うん！もう、使ってみたくてうずうずするよ。」

季衣が鎖を弄りながら嬉しそうな顔をする。

「なら、今からでも陳留に出発するか。野宿することになれば、嫌でも使う機会ができるだろう。」

零の提案に嬉しそうな顔でうんうんと何度も頷く季衣と流琉。

「じゃあ、急いで宿に行つて、荷物を纏めてこい。」

「うんっ！！！」

季衣と流琉は走つて宿に向かつて行つた。

昇り竜との出会い（後書き）

やっと、武器ゲットですね。

遂にあの金髪ドリルの霸王様に会つかもです。

零達が魏の武将になるのかっ！！！！

ご期待下さい。

狼と夏候姉妹の出会い（前書き）

ちょっと、どっつい展開にしようか迷っているこの頃。

どっど。

狼と夏侯姉妹の出会い

場所、陳留の街中。天気、晴れ。

「うわあああ！！！すごーーーーーい！！！！」

「こんな街、来た事ありませんっ！！！！」

季衣と流琉はこれ以上ない程はしゃいでいた。

「あんまりはしゃいで俺と逸れるなよ。」

「分かってるよーーーー！！」

「大丈夫です、兄様ーーーー！！！！」

武器を手に入れた零達一行は数回の野宿を経て陳留の街へと到着し、一日の休息を経て存分に遊び耽っていた。正確にははしゃいでいるのは季衣と流琉だけなのだが、ここは大目に見るところだろう。

（ここまで無邪気に楽しめたら、何か言う気もなくなるな。）

季衣と流琉は着いた当日からテンションマックスの状態で今すぐ街を回りたいと言っていたのだが、生憎着いた時には日が大きく沈み、どの店も暖簾のれんを下げ始めおり、遊ぶには遅すぎる時間帯だった。季衣と流琉はかなり残念そうにしていたが、そこは零がたしなめ、季衣と流琉は明日に備えて早めに寝ることにしたのだ。

そして今日。季衣と流琉はその溜めた体力を存分に使い、楽しんでいるという訳だ。

「にいちちゃん！にいちちゃん！次はあそこのお店に行こうよ！！あそこの焼売美味しそうだよ！！」

「えーーーー！！あそこの麻婆豆腐の方が美味しそうだよつ！！」

言わずもがな、行っている店はどれも飲食店ばかりだが、それでも二人が楽しいならいいかと思う零であった。

「焼売つ！！！！」

「麻婆豆腐つ！！！！」

「落ち着け二人共。別に焼売や麻婆豆腐が逃げる訳ではないんだから順番に行けば良いだろう？どのみち俺はもう食べられないから二人の好きにしたらいい。」

いつの間にかどっちを食べるかで喧嘩を始めていた季衣と流琉の仲裁に入る零。にいちちゃん（兄様）がそういうならと一旦引き下がる季衣と流琉。そんな二人を見て思わず頬を緩ませてしまう零だった。この後どっちに先に行くかでまた言い合いが始まったのは言うまでもないだろう。

そもそも、季衣と流琉がここまでしゃいでいる理由はというと、この街の桁外れの活気にある。前の街も今の時代を考えたらかなり治安が良く、活気に溢れる街だったのだが、この街はさらに桁違いだ。街の門では商人や旅人が忙しく出入りし、街を行き交う人々は皆笑っている。そんな思わず誰もが笑顔になるような街。二人がはしゃぐのも無理はない。

（しかし、二年前に来た時も良い街ではあったが、これほどではな

だ。

「てめえっ！！そこをどけっ！！！」

「あん？」

盗賊の前には悪人ではないが正義の味方とも言えない何とも微妙な青年が一人。しかも何も知らない盗人は避ければいいものをその人物を殴り飛ばそうとしている。勿論そんなことをしようとしている盗人をその人物、零が通す訳もなく。

「ぎゃあっ！！！」

こうなる。盗人は腹を突き上げられ空中を二回転して地面に激突し、呻いている。恐らく適当にあしらうちもりで軽く殴ったのだろう。そうでなければ盗賊の意識がある訳がない。

「んっ？思わずやつちまったが、一体なんだったんだ？」

訂正。本人は無意識に蠅を手でどこかに追いやったぐらいにしか思っていないらしい。

「てっ、てめえ……！！！！よくも……！！！！！」

「んっ？お前誰だ？」

「ふざけてんのかっ！？てめえが殴ったんだろうがっ！！！」

「ああ、お前だったのか。運が悪かったなお前。お前が俺を避けてりゃ別に何もしやしなかったのにぜ、俺。」

ほんとにそうしていただろうなあ、と、うんうん頷いている少女二人は置いておくとして、そんな完全に馬鹿にしているとしか思えないセリフを吐かれ、完全に頭にきている盗人。冷静に考えればここは逃げることに専念するのが賢い選択なのだが、完全にキレている盗人にそんなことを考える頭は残っていない。ここまで計算して言った言葉なら大したものなのだが、零の場合本当に思ったことを言っただけだから質が悪い。

「ふざけんじゃねえーーーー！！！」

零に殴り掛かる盗人。零はそれをめんどくさそうに眺めながら拳が当たる寸前に最小限の動きで躲し、右フックを鳩尾に叩き込む。

「うぐ……ふお……」

あまりの威力に痛がる暇もなく気絶する盗人。やった本人である零は何もなかったように歩き出す。

「行くぞ、季衣、流琉。」

零に呼ばれて後ろを着いて行く二人、周りの野次馬は呆然と見送るしかない。だが、そのまま人混みの中に消えて行こうとする三人を引き留める人物がいた。

「待て！！その男！！！！」

「ん？何だ？」

そこには長く黒い髪で額を出している鋭い眼つきの長身の女性。そ

の隣には同じくらいの身長で水色の肩に届くぐらいの長さの髪を片目を隠すようにしている知的な雰囲気を纏った女性がいた。

「そこのお前、私達と来い。」

黒髪の女性が突然そんなことを言う。

「はっ？お前ら城に仕えている兵か何かだろ？俺は別に城に呼ばれるようなことは何もしてないぜ。理由は？」

「理由など何でもいい！！とにかく来い！」

「何でもいって……」

「姉者、理由くらい話さなくてはこの者に失礼だ。そんなことでは華琳様に叱られるぞ。」

「しゅ~~~~ら~~~~ん」

水色の髪の恐らく黒髪の女性の妹と思われる女性に注意されると途端に雰囲気を一変させる黒髪の女性。妹には弱いのだろう。

「先程は姉者が失礼した。お主に来てもらいたいのはお主のその腕前を我が主に見せたいからだ。来てはもらえんか？」

「主？確か……そう……悪い、この街の住人じゃないから分らん。」

後ろで黒髪の女性が自分の主を知らないと言われて掴みかかろうとするが、それをなだめるその妹。普通は逆だと思っただが。

「曹操様だ。我が主は優秀な人材を探している。お主ほどの腕なら我が主も気に入るだろう。お主も会ってはみないか？」

「曹操ねえ……季衣と流琉は会ってみたいか？」

零に話を振られて少し考える二人。元々二人は役人や將軍といった、偉い人物が好きではない。今の時代の権力を握っている者に碌な奴がいるとは思えないからだ。だが、ここまでの街の領主というのは興味がある。結局、二人が出した結論は、

「行ってみようよにいちゃん。ここの街の領主なら会ってみたいし。」

「私も会ってみたいです。」

「そうか。という訳だ。会ってやるさその曹操とやらに。」

こうして狼と霸王は会うつことになる。狼が霸王に従うか、従わないかはまた別の話だが。

狼と夏候姉妹の出会い（後書き）

華琳様と零をどうするべきか………一応どっちのパターンも考えているんですけど………

う~~~~ん

まあ、取り敢えず次で華琳様登場です。

試す霸王挑発する狼（前書き）

話が進まない……………

もっと時間が欲しい。どうぞ。

試す霸王挑発する狼

「ここが城の中かあゝゝゝ」

「初めて入りました・・・」

偶然盗人を捕まえる手伝いをしてしまい城に呼ばれることになった零は城内を姉妹の兵士の後ろを着いていつていた。普通、城の中に入るにはいくつかの手順を踏まなくては入れないのだが、顔パスで入れた所を見るとこの二人は將軍か何かなのだらう。門番は零達を見て驚いた顔をして零達を珍しい物を見るかのようにじろじろと見たが、零が人睨みすると慌てて視線を逸らしていた。零の眼つきは最近は見られなくなっていたが、睨むとそこら辺の盜賊など視線だけで殺せる程に厳しい。余り見られなくなったのは言う必要もないと思うが季衣と流琉のおかげだ。それは喜ばしいことなのか分からないが。

そんなこんなで城の中心のある玉座の間。勘違いするといけないのと言ったおくが、曹操は一国の王ではない。今のところは数居る諸侯の中の有望な人物の一人というだけだ。だが、どう考えても玉座にしか見えない一つの部屋。それは恐らく曹操の自信の表れだらう。小心者ではこんなことは朝廷に喧嘩を売ってるとも取られるのできない。

さて、肝心の曹操はというと玉座には姿を見れない。恐らく執務室にでも行っているんだらう。玉座でも政務は出来るのだが、こんな人が百人は入れるであらう駄々っ広い所では落ち着いて仕事もできそうにない。

「おい、何処にいるんだ？お前らの主人は。」

零がめんどくさそうに水色の髪の女性に尋ねる。当然だろう。そもそも今日は一日遊び呆ける予定だったのだ。それをこんな正直言つて全然楽しくないことになったのだ。だるそうになるのも無理はない。

「恐らく政務に励んでおられると思う。今からお呼びしてくる。それと私は夏侯淵だ。そう呼んでくれ。」

「別に名前なんて教えてもらっても使う機会がないと思うけどなあ。あと、俺は真名しかないから教えられないぜ。呼びたいように呼べ。」

零の真名しかないという言葉に少し驚く夏侯淵。

「真名しかないとは変わっているな……まあ、こちらが真名を教えた訳ではないから構わんが。こちらは私の双子の姉の夏侯惇だ。」

「なつ、秋蘭っ！！勝手に私の名前をこいつに教えるな！！！」

勝手に自己紹介された夏侯惇は夏侯淵えお怒鳴りつける。

「別にいいではないか。成り行きによつては私たちの同志になるかもしれないのだぞ？」

「うっ……そ、それとこれでは話が別だ！！！」

「おや、姉者は共に戦う戦友に名も教えないのか？」

「それは……………」

そんな感じで何故か姉妹喧嘩？を始めた二人に零が「さっさとしてくれないか？」と言い収め、姉妹で玉座の前から出ていく。

「つたく、早くして欲しいもんだ。」

零がうんざりしたように呟き後ろにいる季衣と流琉に視線を向ける。そこには明らかに緊張した様子の少女二人。落ち着かない様子で部屋をキョロキョロと見回し、偶に自分の服を気にしたりしている。そんな二人を見た零は溜息を着くと二人の頭に手を置く。

「別にどうにもならないから落ち着け。そもそも行きたいって言い出したのはお前らだぞ？そんなになるなら何で行きたいなんて言っただんだ？」

「そりゃあ緊張はするけどそれでも会ってみたいって気持ちがあつたっていうか……」

「すみません兄様……」

「別に謝んなくてもいいが、とりあえずもうちょっとしやんとしろ。」

気を付けの姿勢になる季衣と流琉。明らかにこっちの方が不自然な分さっきの方が良い。それを見てもう一回零は深い溜息を着く。それから五分程経ち、そろそろ零が欠伸をし始めていた頃。玉座の扉が開く。入ってきたのは夏侯姉妹と金髪のツインテールでそれにくるくるに巻いている小柄な少女。しかしその見た目とは違い明らかに唯の少女ではないと分かる威圧感を出している。これだけの存在感、威圧感を持つてる人間と会ったら萎縮してしまうのが普通な

のだが、

（こいつが曹操か……思ったよりも小さいな……）

やはり、こんな失礼な事を考えており緊張したり萎縮している様子は一切伺えない。しかし、それに反して零の後ろにいる季頃と流琉は完全に萎縮してしまっている。零の服の裾を掴んでいるのがその証拠だ。偉い人物に会うというのに慣れていないのだろう。

そんな、三人の反応を見た曹操が口を開く。

「貴方が凄腕の男？」

「ああそつだ。」

普通凄腕の、とか言われたら謙遜するものなのだが、ノータイムで肯定する目の前の男に驚き曹操は少し驚いた様な顔をし、直ぐに微笑を浮かべた余裕の見て取れる顔に戻す。

「よつぽど自身があるみたいね。楽しみだわ。」

「楽しみ？何かやらせるつもりなのか？」

「ええ、貴方の実力を私は直に見てみたいから、少し私の部下と戦ってもらつわ。」

曹操が言つと零は露骨に嫌そうな顔をする。

「な、何か不満が……？」

多少余裕の表情を崩しながらそれでも笑顔を浮かべながら尋ねる。

「ああ、不満大有りだ。何で俺がこんな所に連れてこられた挙句に雑魚の相手なんかしなくちゃならねえんだ。」

零の言葉にその場が凍りついた。特に曹操は何を言われたか分からないという顔をしている。目の前にいる男は自分の提案を断ったばかりか自分の部下を雑魚と言ったのだ。そんなことを今まで高い身分の曹操が言われた事がある訳がない。

だんだんと落ち着きを取り戻していく曹操の思考。それと同時に湧き上がる怒り。目の前では少女二人がおろおろして「まずいですよお」と言ったり、自分が最も信頼を置く夏侯惇と夏侯淵が撤回するように言っているがもう遅い。曹操は夏侯惇と夏侯淵を押しつけて零の前に立つ。

「雑魚とはどういう意味かしら？」

静かな一言だったが、その言葉には怒気が含んでるのはこの場に
いる全員に分かった。

「ちょっと言い方が悪かったかもしれないな。俺から見たら雑魚の
兵士の相手を何で俺がしなくちゃあならないんだ。お前の部下で一
番強い奴を呼んで来い。」

「言うわね………春蘭っ！！！」

「はっ、はい。」

「貴方がこの男と戦いなさい。」

夏侯惇と夏侯淵は驚いて曹操に考え直すように言う。仮にも自分の

持っている兵士の中で最強の人間を武人でもない人間と戦わせるなんてことをしたら大怪我をさせてしまう。勿論、怪我をさせないようには手加減することも出来るが、今の曹操は叩きのめせというだろう。そうなたら最悪まともに動けない体にしてしまうかおもしろい。

そう二人は悪魔でも零の身を案じそう思ったのだが、それが癪に障ったのか零がさらに火に油を注ぐ。

「おい、俺の心配をしてる暇があるならさっさと準備しろ。俺はさっさと終わらせて戻りたいんだ。」

ピキッ

そんな音が聞こえた気がした。

「貴様ーーーー！！この私を馬鹿にするかっ！！やれるものならやってみろっ！！！！」

今にも襲い掛からんといった様子で激怒する夏侯惇。

「言われなくてもそうするさ。」

そついうと夏侯惇はさらに怒りを増して部屋を出ていく。それに零も続きその後ろを曹操、夏侯淵、季衣、流琉が着いていく。

（どうしたんだろうにいちゃん・・・？）

（何だかいつもの兄様じゃない・・・？）

季衣と流琉は心配もしていたが零の態度に疑問も持っていた。一見いつも通りに見える零の言動だが、いつもの零とは明らかに違う。

（いつものにいちやんは誰かを挑発したりしない・・・）

（それに何だか怒ってるというか、あの人達を敵視しているような・・・）

零と出会ってからずっと間一緒にいた季衣と流琉だ。零の行動パターンや性格はそれなりに分かっている。分かっているからこそいつもと違う零に言いようのない不安を覚えるのだろう。

と、考え事をしている内に広い庭のような所に出る。ここで戦うのだろう。

「ここでやるのか。」

「何か不満でも？」

「いや、何も。」

後に魏武の大剣と謳われる夏侯惇と一匹の狼の戦いが始まるうとしていた。

試す霸王挑発する狼（後書き）

次は久々の戦闘パートですね。

戦闘パートは難しいですが、頑張ります。

狼の実力（前書き）

戦闘描写、やはり難しい……何かアドバイスがある人は下
さい。

どうぞ。

狼の実力

冷たい床。

そこが少年の居場所だった。いつも目を覚まし、血反吐を吐く程の労働で僅かな金を稼ぎ、実の親に憂さ晴らしで殴られ、傷ついた体を休める為にいつも目を閉じる所。いつも暖かい寝台の上で起き、体を動かし、学問に勤しみ、疲れた体を柔らかい布団で休める人間には想像もできないだろうが、それが少年の毎日だった。そして、今日も少年は目を覚ます。

「朝か・・・・・・・・・・」

まだ太陽も姿を現していない時間帯を朝と呼べるものなのかは疑問を持つが、少年は毎日必ずその言葉を口にした。自分が気絶で意識を失ったのか、それとも死んでしまったのかも分からない少年にとっては自分が生きて今日を始められたという事に対する確認なのかもしれない。これだけでも普通の人間にとっては普通の事が少年にとっては普通ではないことは分かって貰えただろう。こんな普通ではない少年を知ったら同情する人もいるかもしれない。

だが、普通というものは他人が決めるものではない。普通とは決められた線がある訳ではなくその人物個人が決めるものだ。これは何も普通に限られたものではない。

簡単、難しい、楽しい、つまらない、気持ち良い、気持ち悪い、痛い、痛くない、可愛い、綺麗、美しい、醜い、汚い、綺麗、強い、弱い、幸せ、不幸。

数え上げれば切りがないが、つまり全ての感情に決まった線などないのだ。周りが見れば汚い物も本人から見れば綺麗かもしれないし、本人にとっては気持ち悪い物が他の人間からとっては気持ち良いかもしれない。

自分の事を理解できるのは自分だけ。

そう考えていた少年は誰かに同情されるのを最も嫌った。もし、本当に理解する気もない綺麗で最も汚い励ましの言葉なんて掛けてくる奴がいたらその場で殺す程だ。自己満足の為に掛けられた言葉程汚いものもない。そんなものは他人を使って自分を綺麗に見せようとしているだけなんだから。言葉だけではなく行動で実際に助けてくれる人間などいるわけもないのだから。

「行くか……」

少年は身支度も着替えもすることなく外に出ていく。ちなみに来ている服は服と呼べる物なのかも怪しい。いや、元々は服だったのだろうが、所々にある縫い合わせた跡や使い込んでいる証拠の擦れて今に破れそうな傷少年の仕事場であろう大量の綺麗に長方形の形で揃えられた岩が並べられた場所に着く。

そでただの上下揃ったボロ布にしか見えない。そんな服で暖かい訳もなく、身を切るよう冷たさの風は容赦なく少年の肌に襲いかかる。しかし少年は慣れているのか、特に寒がったりする様子は見られない。そして、そのまま平然とここには既に数人の人間がせつせと岩を運んでおり、少年もすぐに加わる。周りに見えるのは屈強そうな男達だけでどう見ても少年はその場で浮いている。だが、見た目に反してやっている仕事の内容は引けをとっていない。多少辛そうにしてはいるが、他の男達と同じ作業スピードで次々に重さ五十キロはある岩を運んでいく。

そして一度も休むことなく迎えた夜。働いていた人間はその日の給料を受け取っていた。勿論それは少年も例外ではなく、精も根も尽き果てた男たちの列の中に混じっている。

「次、三十六番っ!!」

監督らしき人物の声が少年の番を告げる。

少年は男の前に出ると袋で包んでもいないそのままの金を貰う。そして、金の数を確認すると兵士の顔を睨みつける。だが、兵士はにやにやと汚い笑顔を浮かべるだけ、それを見た少年はチツと舌打ちをしてさっさと列から抜けていく。

（まったく、市民の平和を守る城勤めの兵士が笑わせるぜ。こんな餓鬼からも金をむしり取るんだから。結局偉い奴なんてのはみんなそうだな。下の奴らを甚振ることばかり考えて、守るつもりなんて欠片もありゃあしねえ。）

少年は偉い人間、人の上に立っている人間が好きではなかった。人の上に立っている人間なんてのは綺麗な言葉だけ並べて実際は下の人間を食い物にしている奴ばかりだ。もしくは何も知らずに人の苦勞の上にのうと座っている奴。そう決めつけていた。実際に九割九分そんな人間だろう。

（助けてくれる奴なんていない。守ってくれる奴なんていない。自分の身は自分で守るしかない。この世界がそうできているんだってんなら・・・・・・・・俺はそれに従うだけだ。）

そして少年は自分の居場所へと向かう。新たな居場所を手に入れるために、今は耐えるしかない、一つの決意を胸に抱きながら。

「さあ、掛かってこいよ。」

剣も抜いていない状態でそう言う零。その言葉に夏侯惇は零を睨みつける。

「貴様……ふざけるのもいい加減にしろ。剣も抜いていない者をこの私に斬れというのか？」

「剣を抜いていないと戦えないか？」

「当たり前だ！！丸腰の人間に斬り掛かれるかつ！！！」

剣で空を横に切り裂いて叫ぶ。その姿を見た零は苦笑する。

「甘いな。ただただ、自分の武を磨き続けた者の言葉だ。だが、そうしない戦えないというなら抜いてやるよ。」

零は腰に下げていた剣を抜き構える。

「じゃあ今度こそだ。掛かってこい。」

「はあああああああああ！！！！！！！！」

夏侯惇が強く地面を蹴り一步で三メートル程の距離を詰め、その勢いのまま渾身の一撃を振り下ろす。

（終わったわね。）（終わったな。）

曹操と夏侯淵はそう思った。夏侯惇の一撃の威力は自分たちが良く知っている。大抵の人間は反応することも出来ずに真つ二つにされるし、もし運良く剣を滑り込ませることができても大木すら両断する一撃を受け止まられる訳がない。運が悪ければ死んでいるだろう。そう思った。

・・・・・・・・

曹操と夏侯淵は

ガキイイン！！！！！！

甲高い金属音が響く。

一見当然の事のように思えるがそれは違う。曹操達の予想通りに剣が折られたならこんな音は響かない。つまり、受け止めたということだ。

「どうした？こんなもんか、お前の力は。」

「っ！？！？！？！？」

零は顔色一つ動かさずに夏侯惇の渾身の一撃を受け止めると振り払うように夏侯惇を弾き飛ばす。

「これが、全力か？だとしたら拍子抜けだな。この程度の奴が最強の部下とは。もし本気じゃないなら遠慮はいらないぞ？本気で来い。」

「なっ、なめるな————！！！！！！」

再び距離を詰め、今度は多角的な攻撃を繰り返す。並みの武将なら

数合持たずに斬られるであろう連撃。だが、それをも零は平然と受け流す。

「なっ、何が起きているの……？」

「姉者が……こんな……」

曹操と夏侯淵は信じられないという顔で呆然と目の前の光景を見つめる。無理もないだろう、今まで戦闘に置いては絶対の信頼を置いてきた人物が目の前でまるで子供扱いにされているのだから。

「貴方達。あの男は一体何者なの……？」

曹操は目の前の男が連れていた二人の少女に問いかける。その姿にさっきのような威圧感はなく、代わりに戸惑いが見て取れた。

「私たちも兄様のことは詳しく知らないんです。私たちは本当の兄弟じゃありませんから。」

「ただ、分かっているのはにちゃんめちゃくちゃ強くて分かりにくいけどとても優しいってことだけだよ。」

「私たちはとんでもない男を見つけてしまったのかもしれないわね……」

そう呟くと視線を零と夏侯惇に戻す。そこには今にもやられそうな夏侯惇がいた。

「ぐはあっ……！」

零の剣を受け止められなくなった夏侯惇は弾き飛ばされ、地面を転がる。そして零の剣が目の前に突き付けられる。

「所詮はこんな程度だ。強くなくても死ななかつた人間が強くならなくては死んでしまっていた人間に勝てるわけがない。」

「それは一体どういう………?」

「知らなくていいさ。お前らには関係ない話だ。」

「……………」

零は黙り込む夏侯惇を数秒眺めるように見ると、やがて興味を失くしたように剣を腰に戻し歩き出す。

「行くぞ。季衣、流琉。俺は曹操に仕える気はない。こんな部下しか持てない奴が大成を成すとは思えないからな。」

そう言つて去つて行こうとする零。その後を季衣と流琉が追おうとするが立ち止る。どうしたのかと零は季衣達のいる方に振り返る。そこには再び剣を構えている夏侯惇がいた。

「まだ、やるつもりか? お前じゃあ何度やつても俺には勝てねえぞ。」

「確かにお前は強い………現状、確かにお前の方が私よりも強いだろう………だがっ!! 私のでいで華琳様が侮辱されたとあつては引くわけにはいかんっ!!!!!!」

そこには圧倒的な實力差を見せられた絶望した目ではなく主への忠

誠心が見えた。零はその夏侯惇を驚いた顔で見ると片方のみ口元を上げる。

「少しお前を甘く見過ぎてたみたいだな．．．．．本気で相手してやるよ．．．．．牙っ！！！！」

零が叫ぶと何時の間に城内の中に入ったのか庭の木の中から牙が跳び出し零の横に並ぶ。それを見た曹操と夏侯淵は驚く。馬が突然現れたことにはない。その馬が身に付けている長さは二メートルを超えるだろう大剣にだ。

（あんな物をどうするつもり．．．．？）

そんな疑問は一秒で解決される。零が片手でそれを引き抜いたのだから。

「なっ．．．馬鹿な．．．あれほど巨大な剣を片手で．．．．．
・なあ、あの男はいつもあんな物を扱っているのか？」

「う、ううん．．．．．ぼくたちもあれを使うところは初めて見るよ．．．．．」

「初めて見ます．．．．．」

「そうか．．．．．」

まるで未知の物を見るように三人は零を見つめる。

「久しぶりだな．．．．．大牙使うのは．．．．．本気でやるからな？」

「望むところだ。」

「じゃあ、行くぜ。」

零は片手に大牙を持ったまま一メートル程跳び上がり夏候惇に向かって振り下ろす。本能が夏候惇に避けるとサイレンを鳴らす。この一撃を受けてはいけなと。だが、夏候惇は。

「（避ける訳にはいかんっ！！ここで避けては華琳様にも本氣を見せてくれたこいつにも会わせる顔がない！！！！）はああああああああああ！！！！！！！！！！」

夏候惇は渾身の一撃を迫りくる大剣に叩きつける。ガキイイーン！
！！！！と音とが響く。そう響いたということは、折られていないと
いうことだ。

「大したもんだな．．．．．」

零が振り下ろした所には大きな亀裂があり、夏候惇の姿はない。

「まさか剣の軌道を変えられるとはな……」

夏候惇は亀裂から数メートル離れた所に俯せで転がっていた。その体は赤く染まっではない。零はフツと笑うと季衣と流琉を呼び今度こそ立ち去って行く。

「そいつは強くなるぜ。俺が保障する。それとさっきの言葉は取り消す。こんな奴が忠誠を誓うお前なら何かでつかい事を成せるかもな。俺はあんたには従わねえが少しは認めてやるよ。」

零はそう言つと二人と牙を連れて城を出ていった。残された曹操は満足そうに気絶している自らの部下を見つめ笑った。

「フっ、はははっ!!」

「華琳様？」

どうしたのかと夏侯淵は思う。自分の自慢の部下完膚無きまでに叩きのめされたというのに笑うなんて分らないという顔だ。

「おもしろいじゃない……次、会うときはこうはいかないわよ。」

ああ、と夏侯淵は思う。

（これでこそわが主。）

「秋蘭っ!!次は同じようにはさせないわよっ!!」

「はっ!!」

こうして霸王はさらなる勢いをつけてその覇道を走り出す。いつかまた狼に会う日の為に。

狼の実力（後書き）

霸王ルートはやめる形でいきました。なんかよくある展開過ぎると思ったので。

あと今の春蘭は原作開始時よりも弱いです。零はかなり強い設定ですが、チートではありません。

これからの展開は次で分かりますと思います。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0595x/>

～ 孤高の狼 ～

2011年10月12日08時01分発行